

シスコンな兄は過保護なのです。

奈々歌

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

科学では解明出来ない超常的な力。世の中ではそれを“超能力”と呼んでいた。

だが、その概念を覆す発見が二十世紀末期に起きる。それは後に“アストラル粒子”と命名される粒子の発見。

この発見により“超能力”は科学的に解明され始めた。そして“超能力”を“アストラル能力”。扱える者たちを“アストラル使い”と呼ぶようになってしまった。

主人公、【在原伊吹】はそんな世の中を平穀に過ごしたいと願う普通の高校生。学校に通い、可愛い妹の作るご飯を食べて、家に帰つて寝る。

そんな日々をこれからも送りたい。俺にとつて、それが“幸せ”といふものなのだろうと思つてゐるから。今の自分としては。

だが、世の中そんなに甘くはない。今夜も仕事用の端末が音を鳴らすんだ。昼間とは違い、平穀の欠片もへつたくろもない“仕事”的刻。俺に静かな夜はないものか……。

まあ、これは自分で決めたこと。自分を変える為、あの場所から抜け出す為、大切な人を守る為……。過去の柵みを乗り越えて、進むと決めた道。

眠らずに色鮮やかで輝く夜の街に下りていく。

そう、俺は“アストラル使い”なのだから――。

目  
次

Chapter.	Prologue																				
16	5	4	3	2	1	0	1	1	1	0	1	0	1	0	1	0	1	0	1	0	1
118	108	96	84	80	72	63	59	53	48	43	38	32	28	24	17	11	7	1	0	1	

潛入、編入、橘花學院。Chapter. 1

# Prologue Chapter. 0

## Chapter. 0-1

薄く、明確としない世界——ああ、これは夢だ。

そう分かってしまうのだから不思議なものだ。何度も同じ経験をしているからか？

過去の夢。思い出したくないこと。混ざり合い、混沌した取り留めのない記憶の欠片たちが俺を苦しめる。

何故、助けられなかつた？

何故戸惑つてしまつた？

救えたはずなのに、力はあつたはずなのに……。  
どれだけ後悔しても取り戻せるはずはないのに。

何度も何度も振り払おうとしても頭に染みついてしまつて離れてくれない。それらが時折こうして夢となり、姿を現わしていく。

“忘れるな”と言わんばかりに。

今回はどの部分だ？

何を見せたいんだ？

もう俺は新しい道を進んでいるんだ、邪魔をしないでくれ。

確かに「お前ら」から学んだことは多い。だけど必要無いんだ。俺は強くなつたんだ。あの頃より、ずっと、ずっと――。

†

「——大丈夫かい、少年」

過去。名も知らぬ男がそう問い合わせて来る。

少年は壁に背を預けて座り込んだまま。

男の質問に対し、どう答えたかなんて覚えてはいない。ただ、笑つていなかつただろう。それは確かだ。

周囲は硝煙の匂いと“鉄のような”匂いが漂う。

鼻につく匂いのはずが、慣れてしまえば何も感じない。

それ程までに「ここ」での生活が濃く残るから。

一歩、また一歩。見知らぬ男は歩み寄つて来る。構えてはいないが、その手には黒く光る金属質の物体。見たくもない物、拳銃。彼の他にも数人、黒い服を着た奴らがいるが、後方に待機しているだけだった。多分だが、この男が頭なのだろう。

「（なら、都合がいい）

少年の手が素早く動く。立ち上ると同時に何かがその手から放された。

暗い場所で微かな光を反射し、飛来する“それ”は男の手に握られていた拳銃を勢いよく弾き飛ばす。

「おおつと！？——それが君の“能力”か、びっくりしたぞ」

弾かれた拳銃は石床の道を転がっていく。男は手を押さえながら數歩下がつた。

その反応に対して、後方の男たちは銃を構える。

「待て待てっ！ 絶対に撃つなよ。威嚇だとしても、撃てば交渉は出来なくなってしまう」

男は、痛まない方の手を後方に見えるよう翳し、臨戦体制に入つた男たちに制止をかけた。

今……交渉と言つたか？

攻撃してくる気配がない。……だが、武装している者の前で、油断や隙は厳禁。

ジリジリと後方に下がる。最悪の場合、逃走も視野に入れた行動。その意図を読んでか男が動く。両手を挙げながら。

「ああ悪いな、こんな物騒なもん持つてちや、警戒されても仕方がないよな。この辺りはあまり治安が良くないから護身用に持つていただけなんだ、信じてくれ」

敵ではない。そう言いたい、示したい。あの行動はそれを意味するものだということは知つている。

——それは罠でされなければ、の話だがな。

「君に話があつてここまで探しに来たんだ。どうかな、僕の話を聞いて貰えないだろうか？ もし信用出来ないなら“これ”を使うとい

い」

そう言つて男は腰から予備で携帯していたと思われる拳銃を少年に向かい投げる。カラカラと音を立てて、少年の足下まで届いた。

「……。俺は人を信じることができない。できなくなってしまった……」

それを少年が手に取ることはなかつた。

少年は知つてゐるからだ。この武器は軽いのにとても重いということを。

簡単に命を奪えてしまう。容易に手にしてはいけない物だということを。

「大丈夫だ。だから俺たちが迎えに来たんだからな」

その姿を見て、安堵の笑みを浮かべる男。荒み、傷ついた少年の心に優しく触れるように言葉を掛けていた。

だが……少年は理解出来なかつた。疑いの目で男を睨む。

「……お前の言つてゐる意味が分からぬ……」

虚無感が嫌というほど伝わってくる瞳が男へと向けられる。常人ならこの時点で彼から目を背けてしまうことだろう。

関わりたくない、関わつてはいけないと。

一体何がこの子をここまで追い詰めてしまつたのか？

それはこの子にしかもう分からぬこと。

俺たち——男の連中が知つてゐるのは彼が今に至つた経緯だけだ。でも、助けなくては。

この子はもう「ここ」にいてはならない。

「なら、单刀直入に言うよ。君に俺たちの仲間になつて貰いたいんだ」手を差し伸べられた。

ゆつくりと、静かに。

……。

……。

男の手を見ながら、少年は逡巡する。

結局その手を取つたのか？ まあ、結果は言わなくとも分かるか。

今、こうして夢を見ているんだからな。

夢の世界はこの場面を最後にして次第に霞んでいく。  
伸ばした自分の腕を視界に捉えたのが最後だつた。

†

蒸し暑い熱帯夜。ただ今、夏真っ盛り。

宵の帳が下り、闇の色が深くなる。人々が眠りについた静かな刻。  
夢の途切れ。朧気な意識の中で目が覚めた。

いや、こんな夜だ。寝苦しくて起きてしまったのかも知れないな。  
「ああ……。まだこんな時間、か……」

寝癖のついた髪をガシガシ搔きながら、枕元に投げていた携帯を手  
に取り、電源を付ける。

ロツク画面に映し出された時刻を眩しさで目を細めながらも確認。  
日付が変わつてまだ少し。

二度寝しても平気な時間だ。

大きく欠伸をした後、枕に顔を埋めて、再び眠りの世界へ誘われよ  
うか――。

携帯を再び枕元に置く。隣に並んでいた別の通信端末に当たり、力  
チャリと音がなつた。

「(あんな夢を見た後は、暫く思い出さないから少しは安心かな……)」

そんなことを思いながら、意識が沈むあと少し。

枕元に置いていた別の方が微震と着信を知らせる音を鳴らした。  
面倒くさそうに手探りで腕を伸ばし、顔をそのままに通信を開く。  
受話口を耳に当て、寝ぼけた調子の声で答える。

『……ふあい。こちら……すうすう……』

『あ、こんな時間にごめんね！――つて、ちゃんと起きてよレヴィ0  
！』

寝起きで回らない頭に少女の声は良く響いた。ああ、この声は――。

『はいはい、起きました、はい。可愛い可愛いレヴィイ9』

凄く聞き覚えのある声。可愛い妹の声だ。暮らしへ別々だけど。

そして「レビイ」とコードネームの方で俺を呼ぶということは……。

『そういう冗談今はいいから！ 悪いけど、すぐ動ける!?』

……やはり“仕事”か。

昨日出たから今日は無いと思っていたけど、緊急で舞い込んだのか？ でも、そこまで大仕事でなければ、レビイ9とレビイ6で難なくこなせるはずだが――。

『……何があつた？』

『今回の任務“外”からの情報だつたから、少し錯誤があつたみたいで……』

焦りの色を見せる声にかなり不味い状況なのだろう。

珍しいな、あの二人が。

まあ、管轄外からの情報なら不備も多々あることは仕方ない。不確定要素なんて当たり前。

だから、本当はそういうった任務を妹に渡したくない。

“上”は何をやつていて、それにレビイ6は。

『分かつた、状況は移動しながら確認する。俺の端末にアイツの現在地と任務情報を送つてくれ。手短でいいからな？ 時間が惜しい』

『う、うん。すぐ送るね』

レビイ9に繋がる受話口から何かを操作しているような擦れる音が微かに聞こえる。

そして数秒後、手に持つ端末が震えた。

一度耳元から離し、画面を確認する。

赤い点が示した場所、ここから数十キロの地点。

『確認した。三分で現場に“直接”乗り込む。レビイ6に俺の到着と同時に退避を指示しておいてくれ。短時間で対処する』

『レビイ9、了解。警察ももう動いてるから顔を見られないようにな?

『分かつてる。ああ、それとだな……特別報酬として“あれ”お願ひな。あれば俺の原動力だからさ』

『それは……うん、分かつた。ホント、特別だから、ね？』

照れくさそうに返事をするレビイ9につい笑みを零してしまった。  
携帯越しだから表情が向こうに見えることはないのだけれどね。

笑つたら眠気も飛んだ。

「可愛いやつだな」と言い残して通話を切る。

最後にレビイ9から何か言われたような気もするが……まあいい  
か。その辺は任務の救援を済ませてから。

クローゼットを開き、隠し板を捲ると、黒い服が掛けられていた。  
寝間着からこの“仕事着”に着替え——いや、これ暑いからいい  
や。

「夜だし、こっちでいいか」

隣にあつた簡単な軽装を選択。  
レビイ9に怒られそうだけど。  
顔を隠すのはサングラスでいいか。

専用の武器を腰に装備し、端末を仕舞う。  
窓を開け、枠に足を掛けると、そのまま蹴り出し夜の世界へと飛び  
出して行つた。

## Chapter. 0-2

場所は街外れの港。

そこに建ち並ぶ倉庫の内の一つ。

静かな夜には似合わない、金属同士が弾け合う特有の高音——“銃声”。

途切れることなく、音は鳴り続けていた。

そんな喧騒の中を黒い服装に身を包んだ少年が駆けていた。  
足下を数多の銃弾が擦れていく。

「（“あれ”をどうにかしないとな……）」

だが、奥まで追い詰められてしまい、倉庫内に積まれた人一人が隠れることの出来るコンテナの裏に転がり込むことで一時的に逃れる。  
銃弾の光が横を数発通り過ぎていく。

対面に着弾して激しく耳を劈く。

「おい、今之内に積み込めつ！ 他の奴らが来る前に撤収するぞ！」

少年が抵抗出来ないと判断したリーダー格と思われる男が声を上げる。

「不味い、このままだと逃げられてしまう」

今回の“仕事”。

任務で少年——レビイ6はここに襲撃していた。  
内容は二つ。

一つは違法物の裏取引現場を押さえること。

もう一つは相手を無力化し、警察の到着まで時間を稼ぐこと。  
目的対象の物は確認した。

二グループいる相手の数を合わせても二桁には達しない。  
普段通りに行動すれば、まず問題のない任務だつたはず。

だから“上”も俺たち二人で問題ないと向かわせたのだろう。  
まあ、誤算があつたとしたら情報の不備つてところか——。  
それは敵の中に“アストラル使い”がいたこと。  
そもそも視認系統の相性が悪い能力だ。

『レビイ6、聞こえる？』

耳に付けていた小型の通信機から声が流れてきた。

同じく任務にあたる相棒、レビイ9の声。

通信機に手を当てて覆うと、周囲の雑音をなるべく取り除くようになる。

『こちらレビイ6。どうした、あまり余裕はないんだが——』

『音を聞けばそんなこと分かつて！　すぐにレビイ0が応援に来てくれるから、到着と同時に避難して。巻き込むかも知れないからつて』

レビイ6の言葉を遮り、レビイ9が次行動の指示を出す。

『レビイ0が？　了解した』

通信を終了すると、丁度銃声が止んだ。

僅かに顔を覗かせて様子を窺うと、警戒に二人だけを残して他の連中はそれぞれがトラックと船に荷物を運んでいた。

「レビイ0が到着するまで、時間を稼ぐか？」

レビイ0が来るということは、レビイ9の連絡から時間差を考えて、後……一、二分つてところか。それなら容易い。

レビイ6はコンテナから飛び出す。

警戒に当たっていた男の一人が反応し発砲する。

隣の男は反応出来ていない。

それもその筈、反応した方は“アストラル使い”。だから“俺の姿は見えている”的だ。

「（一人ならないける）」

地を蹴り、銃撃を搔い潜つて接近していく。

拳銃を持つ腕を手で弾くと、胴体に体当たりを食らわせた。

「ぐつ……くそ、が……」

男は呻くと昏倒し倒れる。

これで面倒な奴は対処した。

これで俺の姿は再び相手に“見えなくなる”。

少しは安心か、そう気を緩めたのがミスだった。

「こつちだ、全員で囮め！　姿が見えなくとも囮んでしまえば関係ない」

積み荷に割いていた連中が騒ぎを聞きつけ戻つて来てしまった。  
全員武装している。

やはりか……。この情報で一番重要な部分は当たりだつたようだ  
な。

再度、追い詰められた状況に陥つてゐるにも関わらず、頭にそんな  
思考が通れるのは、ほぼ確実にこの状況を開拓できるという安心から  
か。

相手はその間にもジリジリと隙間を埋めながら間合いを詰めて來  
ている。

「実体はあるんだ、何としても掴め」

包围された円が縮まる。

後、数歩で退路は完全に断たれる。  
だが――。

『こちらレヴィ0。突つ込むぞー。タイミングで退避しろよ?』

突然、通信が入つた。

次の瞬間、銅板製の屋根に穴が八つ一斉に開くと、大きな輪つか状  
に点々と月明かりが差し込む。

一人を除き、この場の全員が視線を集めの中、その部分を蹴破つ  
て、一人の男が乱入して來た。

「レヴィ0、現場に到着。これより無力化行動に移行する」

立ち上がると、腰に提げた入れ物から鎮圧用ゴム球を取り出す。そ  
の数、八つ。

大きさとしては指の間に限り限り挟まるほどの物。

『レヴィ6、退避完了』

『あいよー』

先の除いた一名。

レヴィ6はレヴィ0の派手な登場により、敵の注意が逸れたことで  
倉庫外に避難を済ませていた。

「さてさて、これで心置きなく暴れられますな」

レヴィ0は通信に軽く返すと、周囲に対しても神経を尖らせていた。  
既に全ての銃口はこちらに向いている。

まあ、流石に狙われるよな……それが狙いなんだけども。

「おいお前、あの“透明野郎”的仲間だろ？大人しくそいつを引き渡せば、アンタは見逃してやつてもいいぞ、少しの猶予をくれてやる。選びな」

連中の一人がそんな提案してくるが、その台詞を吐く奴は大体嘘つきと相場が決まっている。

銃を持ち、一人を相手に包囲している状況。

自分たちが優勢だとでも思っているから、そんな悠長にできるんだろうな。

例え、目の前の人物が“アストラル使い”だとしても。

悪いが、元々取引する気なんてないし、そもそも時間も少ないので猶予もいらないです。

「さつさとこいよ、その手に持つてるのは脅し用の小道具なのかい？」人差し指を数度曲げ伸ばし挑発する。  
それが戦闘開始の合図となつた。

# Chapter. 0-3

『こちらレヴィ9。任務完了しました』

あれから一時間ほどが経つていた。

ここは何処かの屋上。人気のない……というよりも、そもそも人が立ち入れる造りではない。普通は人がいるとは思えない場所。

上から注ぐ月明かり。下から見上げる街の灯り。それぞれが二つの人影を照らし出す。黒い制服のような恰好をしたレヴィ6とレヴィ9だ。

「今日はレヴィ0に助けられたね、レヴィ6」

本部への連絡を終え、隣に立つレヴィ6に声を掛ける。だけど、返答はなかつた。小首を傾げてもう一度、次は問い合わせるように。

「ねえ、聞いてるの？ レヴィ6」

「……」

変わらず答えはない。顔を覗き込むと、何かを考えているように目を閉じていた。

「おーい、レヴィ……。暁君？」

「……突然名前で呼ばないでくれよ。任務後だとはいえ、びっくりするだろ？」

「いや、それは暁君が呼んでも反応してくれないからでしょ？ どうしたの、何か考え方？」

「考え方っていうか……」

コードネームではなく、真名で呼ばれて瞼を開けたレヴィ6——暁は首元のシャツをパタパタと動かし、体に空気を送り、籠もつた熱を逃がしていた。

けど、この蒸し暑い夏の夜。生暖かい風が入ったところで涼しくはならない……まあ、多少はましにはなるかもだけど。

「この制服、半袖のも作ってくれないかつてさ。通気性すげえ悪いし、今回はかなり動いたからくそ暑いんだよ。風呂に入つてないのに逆上せちまいそうだ」

「“予算がない”つていつも言つてるからねえ……。はあ、暁君がそ

んなこと言うから我慢してたのにこっちまで暑くなってきたよー  
……」

もじもじと体を捩らせるレビイ9。

不快そうな表情を浮かべ、溜息をつく。

二人が身に纏う制服。支給された長袖の黒い服に白い手袋。いかにも秘密組織つて感じのこの服は、世間一般には出回ることのない特殊な布地で作られていると聞いた。

詳しいことは知らないが、グラム単位で金の数倍の値段になるとのこと。『組織』の末端でしかない俺らにはそれくらいの情報しか伝わってこない。

「はふあわあ……。早く冷房の効いた部屋に帰りたいよ」

そんなことを呟きながらも、任務情報の修正をタブレットで手際良く行うレビイ9。報告書を作成する上で重要な部分を主に。

「それにしても、相変わらずあの強さは異常だよなあ……」

思い出すようにレビイ6が口を開くと、タブレットに視線を移していたレビイ9の瞳が再びレビイ6へ向く。

そして一度開いていた詳細画面を閉じていた。

「まあ、ワタシも近くの監視カメラを使って見てたけど——」

タブレットを操作すると、侵入したカメラで録画した映像が表示される。

縮小画面を指で広げ、拡大。

見やすくなつた映像に映るのは、素人から見ても明らかに一方的としか言えない戦闘の様子だ。

囮まれるレビイ0。不可思議な軌道で曲がる銃弾。次々と倒れていく敵。

一分も必要としなかつた争いは、レビイ0の圧倒で終了。

「今回の任務は後処理が凄い楽だつたつて、さつき連絡した時に室長も言つてたよ」

任務の後処理、それは情報操作のことだ。

あの後、暁が退避した数分後には、赤色灯を鳴らしてパトカーが次々と現場に到着。

慎重に包囲し、倉庫へ突入した警官たちが目にしたのは、既に無力化された犯人たちと取引されるはずだった違法物の山々。

床に散乱する銃の数々は破壊され、犯人も足や腕を負傷。そのおかげか、特に抵抗もなく簡単に逮捕されたとのこと。

「組織」から秘密裏に入手したと思われる情報によると、警察の出した結論は、現場の状況からして交渉の決裂が原因の撃ち合いによる共倒れとなっているそうだ。

大きな裏工作をすることもなく、この依頼は完了となつた。

「レビイ〇——兄さんの『アストラル能力』の使い方は普通できないと思うんだよなあ」

レビイ9のタブレットを暁が覗き込んでくる。

いきなり距離が近くなり、「暑いよ」とレビイ9はタブレットを暁に手渡していた。

自分一人で見れるようになると、暁は画面を更に拡大する。  
観察するように、見入るように。

「ねえ、ところで……伊吹兄さんは？」

録画映像があり、暁がこの場にいるということは、同じく任務に当たった人物。レビイ0の姿があつても不思議ではない。  
そのはずなんだけど——。

その頬は少しばかり赤い。

でも、この深夜の時間。暗い中、暁は気が付いていなかつた。  
「ん？ ああ、『七海に怒られるのが怖い』ってさ。もう帰ったよ」「え、ええ……」

七海と呼ばれたレビイ9。

暁はその様子に疑問を持つ。何を期待していたのだろうか？  
「報告書もあることだし、もう帰ろう。日が昇れば学校もある」「……うん、分かったよ」

明らかに落胆している七海。

既に帰宅の為、背を向けていた暁には見えていない。

「はあ、せつかく心の準備、してたんだけどなあ……」

兄の後ろを歩きながら、七海はそう小さく呟くのだつた。

——リーン、リーン、リーン……。

聞こえてくる電子音。

最初は小さくぼやけてて。

次第に意識がはつきりとしてくると、それが携帯から流れていることを思い出す。

音と同時に起ころる小刻みな振動は、寝そべり、頭を埋める枕まで伝わってくるものだ。

「ううん……。はいはい、起きますよい……」

電子音の元である携帯を手探りで見つけ出し、目覚ましのアラームを止めると、気怠げに起床する。

昨晚の“仕事”的件もあり、あまり寝られなかつたな。ついつい、大きな欠伸が出てしまう。

体を伸ばすと、強張つていた肩や背中が解れていくのは程よく気持ちが良いものだ。

夜中に起きた時よりもボサボサになつた寝癖頭を搔きながら、部屋のカーテンを開けると、朝日の眩しさで目を細める。

一つ、深呼吸をすると、洗面所に寝癖を直しに行くことに。

適当に寝癖を直すと、部屋に戻り、壁に掛けていた“違う方”的制服を着る。朝食は稀にしかとらないので、後は登校するだけだ。

「さてと——。まだ時間はあるな」

部屋に置く時計の確認すると、小一時間の余裕。

机に向かい、キーボードに接続したタブレットを起動すると、最近のニュース等の情報を仕入れながら“報告書”に手を付ける。カタカタと部屋にほぼ一定の調子で音が響く。

一人暮らしだと静かなものだ。

半分は進められたどうか？ 区切りのいい所で手を止めると、再び時計を見る。ああ、もうそんな時間か。そろそろバスが来るな。

保存し、タブレットを閉じると、学校へ向かう為に部屋を後にした。

……。

……。

バスに揺られて数十分。学校に一番近い停留所で降りると、ちらほらと見える生徒に混ざり、通学路を歩いて行く。

途中コンビニに寄り、弁当代わりの昼食を買うことに。

一人暮らしを始めて数年が経つと、自分でも直さなくてはと思う程にだらしなく生活してしまうもの。まあ、俺基準での見解だがな。こんな姿を妹に見られたら怒られそうだ。

最初の内は自炊をし、弁当だつて自分で作っていたさ。料理は出来ない訳ではないからな。

でも、妹が弁当を作つてくれた弁当に比べると……比べることが妹に申し訳ない。

実家のような生活は出来ない。

自炊も面倒になつてしまつた。

だつて、コンビニ便利なんだもん。楽を覚えると、そちらに頼つてしまふんだ。

一人暮らしになつた理由?

……別に大したことではない。兄として心配した結果。あれは確か、妹の忘れ物を学校へ届けに行つた時のことだつたかな——。「おはよーさん」

学校に到着して教室に入ると、軽い挨拶をする。

数人から返つてくる声に笑みを浮かべながら席につくと、時間通りにかつたるい授業を受けていく。

休み時間となれば、友人と駄弁つて過ごす。

昼はコンビニのパンやおにぎりを食べていると、妹の手作り弁当が恋しくなるな。

こうして、基本的に日中は学校に通つてゐるが、放課後となり、部活もない為、寄り道しながらの帰り道。

ズボンに仕舞つていた携帯が振動すると、その日の夜は“仕事”に出来る。

一日、一週間、一ヶ月……そして一年と。

二つの生活を繰り返しながら日々は過ぎていく。慣れてしまえば、それが普通になっていくもの。

過去とは無縁の生活。俺にはそれだけで十二分に満足だった。

——さて、帰つて報告書を完成させたら、昨日の依頼について文句を言いに行こうかな。

## Chapter. 0-4

「ああいつた任務を妹には危険だから俺に渡せつて何度も言つてるよな、親父」

その日の夜。レビイのこと、伊吹は仕上げた報告書を数枚まとめて提出しに来ていた。一週間ぶりくらいになるのかな？　“ここ”に顔を出すのは。

“ここ”とは『情報局特別班』のこと。『組織』の一部、通称——特班。

逮捕権もなければ、捜査権もない。だが、必要となれば超法規的な治安維持活動も執る。アストラル能力などを用いた警察の手には余る厄介な犯罪や事件を対処する為だけに、国によつて設立された非公開の組織だ。

潜入や尾行といった諜報活動を始め、先に現場で犯人を無力化したりと、表の手助けを主に行う裏の機関。活動内容が内容だけに、一部の國のお偉いさん方にしか、その存在は知られていない。

そして『レビイ』のコードネームを持つ俺や暁に七海は、現場で活動するエージェント。普段は学生として過ごし、任務となれば諜報員として裏で動いているという訳だ。

伊吹が“親父”と呼んだ目の前のボサボサ頭はこの“組織”的責任者。室長と呼ばば分かりやすいかな？俺たちの上司であり、“養父”でもある人物——在原隆之介。

社会から弾かれる直前だつた暁。

救い出された七海。

引き上げられた俺。

三人を引き取つてくれた恩人だ。

二人は諜報員として働いているが、別にその為に引き取られた訳ではない。

暁と七海が特班で働いているのは、自分たちの意志で決めたこと。俺と違つてな。

暁はともかく、七海が働きたいと言つた時は先輩として、兄として

止めたさ。あの子には危険の伴うこの世界に関わらず、平和な暮らしへをして貰いたかったから。

だが、七海の決めた意志は固く揺るがなかつた。それに渋々俺の方が折れ、危険な任務では前に出ないことを条件に親父へ話を通したことで、三人共諜報員となつた。

そんな過去もあることで、今回の任務について報告書の提出ついでに、文句を言いに来ていたのだが……。

「ああー……悪い悪い、レヴィイ0。今回は……いや、『今回も』なんだけどな——」

バツの悪そうな顔をしている室長。

妹のことになると、口が悪くなるのは伊吹の悪い癖。七海が妹として家族になつてから、伊吹は過保護な兄と化したのだ。

まあ、可愛い子だからそうなつてしまふのも仕方がないことなのかも知れないが。

長いこと一緒に暮らしているからか、言葉に遠慮がないのは、円満な関係を築けているからだろう。うん、良いことだ。

「上司が言い訳かい、刻むよ?」

「いや違うんだ、話を聞いてくれ。そしてその物騒な物は仕舞つてくれ!」

室長は椅子に座り、両手の平を見せながら、宥めるように苦笑い。いつの間にか伊吹の手に握られているのは専用武器の一つ。鋭利な刃が鈍い輝きを放つ。満面の笑みを浮かべてはいるが、目が笑っていない。

それはもう氷のような冷たい視線で。

「元々、あの任務はお前に任せたはずだつたんだ。だがな、レヴィイ6とレヴィイ9が代わりに引き受けるつて聞かなくてなあ……」

困り顔を見せて頬を搔いた。レヴィイ6とレヴィイ9——暁と七海が?

理由が分からなかつた。どうしてあんな不明瞭な点の多い任務を受けたのか? 危険なのに——。

「……なんで?」

「なんでつてそりや、お前……」

室長は机の上に積み上げられた二つの書類の束に視線を移す。

山のように積まれた束だが、それには差が見受けられた。実に倍ほどの。

この人は全然整理しないから、こんなに溜まっているんだろう。

実家での暮らしでも、七海が掃除しないと散らかしたままだつたらなあ……。などと思いつつも、意味が分からぬといつた様子で首を傾げる伊吹。

それを見た室長は大きく息をついていた。

「あのなあ……見て分からぬのか？ しようがないなあ、多い方がお前の。で、もう一つが暁と七海の報告書だ。内容を確認すれば見分けはつくよな？」

「ああ、それは分かるが——。……それがどうかしたのか？」

皆まで言わなければならぬのかと、ビシツと音でも出そうな勢いで伊吹を指差し、呆れた様子で室長は答える。

「どう見たつてこなしてる量が可笑しいだろ？ だから、なるべくお前の負担を減らしたいつて二人は出来そうな任務を率先して、代わりに引き受けてるんだよ」

「あ、ああ、そういうことね……。通りでここ暫くは携帯が鳴る回数減つたなって感じた訳か。これで謎は解けたぜ、やつたね！」

「なーにが『やつたね！』だ。それでも二、三人分は働いてるんだからな、お前は」

「お給料がいい値になつりますよ、おかげさまでね。一人暮らしは何かと出費が多いからさ。楽を覚えるとお金が掛かるもんなんですわ、これが」

自炊しないと、出費が嵩むんだよね。コンビニで昼食買つたりとかさ。

光熱費もこの仕事で稼いだお金で払っているし、装備の整備代金だつて……。

学生のお財布事情には厳しいものなんだよ。

「まあ、それも明日までなんだがなあ……」

「どうしてだ？」

「あの二人には別の任務を伝えたんだ。ああつと、危険はものではないぞ？ 物騒なものは出すなよ？ これは内部の人間でも限られた奴にしか知らされていないものだ」

口に人差し指を当てながら話をする室長。

物騒なものと言われて、無意識に腰のケースに手を添えていたことに伊吹は気が付く。

「ああ」と咄嗟に手を離していた。

「これは癖なんだ、悪い。——それで限られた者しか話せないって……俺はいいのか？」

「癖ってなんだよ、癖って。まあいいが……。いいんだよ、お前には話しておかなければならないんだからな。任務の内容は『潜入』だ」  
潜入……。場所に寄つてその難度は変わるが、基本的に高い任務となることは必至。

それにこの任務つて——。

「それだと長期間になるだろ？ いいのか？ 俺や二人は学生だから、その類いの案件は他の諜報員に渡されていたはずだけど？」

学生である以上、休日でもないと日中は任務を行えない。その為、学生ではない大人の諜報員が代わりにこなすのが、特班の流れだ。

「ああ。確かにお前たちにはこの間までの夏休みのような長期休みでもない限り、無理な仕事だ。だがな、今回は潜入する場所が場所なんだ。その問題は解決済み。既に二人には月曜日から取り掛かつてもらうことになつている」

話が見えない。場所が場所？ 一体どういう意味なのか。それに月曜日から潜入させるつて言うが、学校はどうするんだよ。

七海は勉学も生活態度も優秀だけど、暁は……あれなんだからさ。その辺りの説明が不十分だぞ、親父。

「そこで、だ。今、お前に任せてる短期間の任務あるだろ？ あれは後どれくらい掛かりそうだ？」

「多分……休み中には終わるかな？ もう少しすれば尻尾を出すと思うから」

簡単な張り込みの任務を現在実行している。相手の動向さえ掴めれば、後は乗り込んで制圧して、警察に現場を引き渡す。

それでお終い。余裕の仕事。

「なら、その任務終了後に新たな任務に就いてもらう」

「それって、もしかして……」

「ああ。この任務には伊吹、お前にも参加してもらう。二人をサポートしてやってくれ。先輩として、兄として、な？」

†

「在原伊吹君が転校することになりました」

土日が明けた日の朝。

いつも通りに登校した教室のホームルーム時間。

担任の先生から最初に告げられたのはそんな連絡。

時期が時期なだけに珍しかったのか、クラスの皆は驚きを隠せない者が多かつた。

その後、何故か前に立ち、挨拶をすることに――。

「ああ、まあ、その……あれだ。突然のことなんだが、今日まではここ

の生徒で、皆とはクラスメイト。今までと変わらない生活を送りたい。変に気を遣わなくて大丈夫だから、な？」

あまりこういうことには慣れていない。

何かしらの言葉を掛けたり、残したり。別れの時にそんな経験をしたことが無かつたから。

初めてで、新鮮な気持ちだが、悲しいものなんだな。

高校に上がつてから知り合つた顔ぶれ。一、二年と、そんなに長い付き合いでもなかつたのに。そのはずなのに……。

……。

。。。

俺の言葉通りか、その日は何も変わらない普通の学園生活だつた。ただ、良く接していた男子グループの皆からは寂しそうな視線を特

に感じたな。

今日は時間の流れが早かつた気がする。

この学校で過ごす最後の時間だつたからか？

まあ、そんなことは今更。授業の終わりを知らせる鐘が聞こえてきた。

「じゃあな、皆。こんな俺とも良くしてくれてあんがとよ」

放課後。仲の良かつた生徒たち、男女問わず見送ってくれた。

「連絡くれよ」「近くまで来たら顔見せろ」。様々な声を掛けて貰えた。とても嬉しかったよ。

校門を潜り、学校を後にする。

何処か寄りながら途中まで帰ろうと誘いもされたのだが、親が車で迎えに来て、そのまま新しい街に行くのだと仕方なく断りを入れた。本当に優しい連中だつた。

惜しい繋がりだつた。

懐かしいものだつた。

まあ、失われる訳ではないが、いつかまた会えることがあるのだろうか？

自分の“仕事”上、そんな心配をしてしまうのは悪い癖なのかな。「悪いな、せつかく馴染めた学校だつたのに。友達と別れるのは辛かつただろ？」

車に背を預け待つ男——室長の団之介が、名残惜しむよう学校を見つめている伊吹に声を掛けていた。

伊吹はそのままに答える。

「別に仕事なら仕方ないことさ、それに——」「それに？」

目線を学校から離し、瞳を閉じる。

少しの間を空けて、その目が開かれたと思えば、その先の向かう場所には夏の空。

「——こういう“別れ”なら嫌いじゃないかな……」

「……そうかい。——よし、車に乗れ。まずはお前の家に寄つて、荷物を載せるぞ」

二人の乗った車は走り出す。

この日の空は今的心と同じ色をしているような気がしていた。

## Chapter. 0-15

親父の車に乗り、自分の家——そっこ高いマンションにある一室に帰つて来ると、まとめていた荷物を自室からリビングに移して置く。

……とは言つても、さほど多い訳ではない。大きめのスポーツバッタクが一つだけ、ホントにこれだけ。

殆どの生活用品はこれから潜入することになる場所へ既に送つてある。段ボールに詰めてな。本の山が重かつたよ、まあ、資料が主なんだけど。

任務の間は暮らす所も変わることになつた。その為の一時的な引っ越し。新たな生活拠点つてやつを作るからだな。面倒くさいものだ。

今回の任務は暁と七海、二人と協力した長期的なものになる予定。暫くはこの部屋ともお別れか……。

留守にする間、この部屋は親父が管理してくれる。まあ、そもそも俺は未成年だから、父親が保証人となつて契約してあつた部屋だから必然的にそうなるのは当たり前。

でも、家賃は自分で払つていたんだぞ？　“組織”つて、ちゃんと給料出るからな。割と高めで。

「なあ、親父。なんでこんなにバタバタしなきゃいけないんだ？　別に俺の合流予定は明日からなんだし、移動も明日の電車でいいじゃん」

忘れ物に電源電気の消し忘れ。

自分の暮らした部屋を後にする前の確認。伊吹はそれをしながら、勝手に人の買い置きである即席珈琲を淹れて飲んでいる親父に問い合わせていた。

先の理由で、都合により今の学校を去ること——それはまだ分かる。だが、今日の内に移動までする訳を知りたかった。

伝えられていた潜入実行日は明日。事を急いでも、良い結果が得られるとも思えない。それに、今回の任務は電車での移動になる、それ

も特急の。

予定もあちら側に合わせないで向かつたとして、何をしていろと？  
潜入場所に入れないし、暁や七海とも打ち合わせ出来ないし……。  
「ん？ ああ、それは……俺が切符を間違えて買ったから、だな。……  
まあ、あれだ、悪かつた。暁に渡す物の手配をしながら合間にやつて  
たらミスつたんだ」

「おいら、上司」

聞けば、本来なら明日の八時近くに発車する始発を予約しておくは  
ずだつたらしいのだが、本日の最終を買つてしまつたとのこと。なん  
て初步的なミスなのか。

「丁度な、決定ボタンをクリックしようとしたら “例の物” が出来  
たつて報告が上がってきたんだ。そしたらな、ついついそつちに意識  
が向いて、いつの間にかカチツつて押したみたいなんだ。時すでに遅  
しつてな」

笑いながら残りの珈琲を飲み干す親父。無言のジト目で見る伊吹。  
確かに親父の言う通り、時遅し。今から新しい切符を買つても間に  
合わない。こちらに届かないからな。

「……はあ。いいよ、慣れてるから。任務に大きな支障はないし、予定  
時間に遅れるよりはいい。適当にあつちで時間を潰すさ」

伊吹は大きく息を吐くと、諦めた様子で「先に行つてるからな」と  
荷物を持ち上げ、玄関に向かう。親父もカップを濯ぎ、部屋を出た。  
ドアを施錠し、鍵は親父へ。一人暮らしも中々に良かつたと思う。  
まあ、家族との生活の方が長かつたからか、物足りなく、寂しく感じ  
はしたけど。

それからエレベーターに乗り、一階まで降りると、マンションの管  
理人さんに会釈。事情は既に説明している。笑顔で見送つてくれた。  
「大変だね、元気でやれよ」と。

気の良いおじさん。また戻つて来れたらお世話になります、そう言  
い残して自動ドアを開いていた。

マンションを後にすると、敷地内の駐車場にとめていた車に手荷物  
を積み込む。そして、駅のある方へ走り出した。

†

……。

……。

道路を進む。

駅に向かう車の中、赤信号で一旦止まる。

「向かう時、電車で中身を見ておけ。今回の任務に必要な情報が入っている」

親父から小型のメモリーカードを渡される。暗号式で秘密組織っぽいやつ。

なんでも、俺や七海が使用している特班特製のタブレットでしか読み取れない仕様になつていてるんだとか。流石、開発部は凄いな。いかにも七海が好きそうな代物だ。

「それと――これがお前の乗る電車の切符、間違つて買つたやつな。それに“これ”も持つて行つてくれ、暁宛ての大事な荷物だ。今回の任務の要にもなる大切な物だからなくすなよ？ 作るのに予算けつこう掛かつたんだからな？」

続いて小さな茶封筒を取り出し、手渡してくる。中身を確認すると確かに切符だつた。

けど、二枚も入つていて。買う枚数も間違えたのか？ それに、やたらとペラペラした極薄の透明シールみたいな物体。

多分“これ”が大事な荷物なんだろうけど。任務の要と言われても使い道の想像さえ出来ないんだが……。こんな物に大金が掛かっているなんてな。貼れば透明人間にでもなれるのかつてな、はは。「この薄つぺらな物体が“例の物”つてやつ？」

「そうだ。お前もよく知る“あれ”だ」

「いや、分からんつて」

「なんだよ、察しが悪いなあ。じゃあヒントだ、制服の素材」

「ああ……つて、それもう答えだよな？」

支給されている制服。念のため、段ボールでは送らず、後ろに置いたバツクに入れているあれのこと。あの制服に使用されている素材はただの布地ではない。

黒い長袖に白い手袋。見た目だけでもそれっぽい色合いなのだが、秘密組織に相応しい特殊な能力を秘めている特殊な物なのだ。

——メモリー纖維。そう呼ばれる特殊な素材。

「“これ”の使い道は曉に聞けばいいのか？」

「そうだ。使用用途は聞いているが、作戦の詳細はあの二人に任せてある。あつちで合流したら、打ち合わせをしてくれ」

「あいよ。後の 大まかな内容はタブレットで確認しておくよ」

話が一段落した頃。信号の色が青に変わり、止まっていた様々なかが動き出していく。その中に混じつて暫く。目的の駅へと到着していたのだつた。

## Chapter. 0-6

「もう一人ここに来るから待っていてくれ、お前の知っている人だから、見れば分かると思う。じゃあ、暁と七海によろしくな。頑張れよ」駅に着き、車から降りると、荷物を下ろす。

助手席の窓が開けられ、親父はメモリーカードに入った任務の詳細確認をしつかりするように。と、そう言い残して車を走らせていつた。

「せめて、誰が合流するかくらい言つてけよ……」

その後ろを見送りながら伊吹は一人呟く。

親父の車が交差点を曲がり、姿が見えなくなると、体を反転させて駅の方へと歩き出していた。

近くの自販機で買った缶を開け、駅前に備え付けられていたベンチに腰を下ろす。

他に人が来るというのなら、改札を通つて駅中に入つてている訳にはいかない。まあ、乗る電車がこの駅に到着するまで時間はまだある……とは言つても三十分程だけど。

時間が時間なだけにこちらに歩いてくる人は疎らだ。学生による最初の下校時間は過ぎていて、社会人の帰宅時間にはまだ早い中間の時間。

待ち人を探すには丁度いいかな。

何気なく駅前の景色を眺めながら、時折飲み進めることが數十分。空になりかけた頃、中央に建つている時計台に目を向けた。

「そろそろ時間だよなあ……」

時間を確認しながら残りを一気に飲み干すと、隣に置く。

時間になつても来ないのであれば仕方がないこと。こちらも都合というものもあるしな。これが本日最後の電車、逃す訳にはいかない。それに、任務が関係しているとなると尙更だ。

伊吹は切符を取り出しながら、もう一度だけ時間を確認する。

「限り限りますは改札口で待つてみるか……」

もしかしたら、何かしらの理由で遅れているのかも知れない。俺の

姿を見つけられず、改札口で待っているかも知れない。

後は……あれだ、道に迷っている人を助けているととかね。

先を決めた伊吹がベンチから立ち上がろうとした丁度その時。

背後から伸びてきた手に切符を一枚持つていかれた。振り返ると、

そこには久しくも見知った人が。

「……大江さん、驚かせないで下さいよ」

「そんなつもりはなかつたんだけどね、あはは」

手に取つた切符をヒラヒラさせながら、笑みを見せる背の高い女性。

この人は大江さんだ。

俺や暁たちと同じく特班に所属するメンバー。多分……一年ぶりくらい？ に会つた気がするな。

「大江さんもこの任務に参加するんですか？」

「いや、しないよ。君たち三兄妹があたるつて室長からは聞いているけどね」

「じゃあ、どうしてここへ？」

「伊吹君の乗る電車、あたしと向かう方向が一緒だつたつてだけだよ」  
「ああ、それで二枚もあつた訳か。納得、納得。——つと、それよりも時間だ。「話の続きを電車の中で」と大江さんと共に改札口に向かることに。

駅のホームでは既にアナウンスが流れ始めていた、危ない危ない。  
線路と車輪が擦れ合い、少し耳に刺さる高い音が鳴り響く。

ホームに敷かれた白線に揃うよう乗降口が綺麗に停止し、この駅を目的とした人々が降りてくる。その後、大江さんと乗り込んだ。

†

「えーっと、席はどこだろうか……」

手に持つ半分の切符を頼りに指定された席を探す。大江さんの席は座席番号的に俺の隣、探さなくてもいづれ見つかるので後ろを付いてくる。

一列目、二列目、三列目と進み……。

「……。ああ、この席か」

乗った車両の一番後ろの席。

前から乗つたものだから探すのに苦労したぞ、おい。

俺が窓側で、大江さんが通路側か。上有る荷物置きにバックを置いて、席に座る。

そして目の前の座席に取り付けられた小さいテーブルを下ろすと、特別製タブレットを立て置いていた。

親父から渡された例のメモリーカードを差し込み、暗号化されるデータをタブレットが自動的に解析し、読み込みを開始する。

完了するまでほんの数秒程度、流石の性能だな。画面に表示されたのは、動画が一本といくつかの資料が入ったフォルダ。

親父が自由席ではなく、指定席で切符を購入した理由。それは背後を気にしないで閲覧可能にする為なのだろうな。

まあ、この国でそこまで心配する必要な無いと思うけどね。

動画データの再生を先に見るとメッセージが出たので、イヤホンの準備をする。

ちなみにだが、これも特班特製。音漏れを完全に防ぐ、超高音質という性能。

市販でもすれば、予算確保も出来るだろうに……めっちゃ売れそうだけどな、これ。

予算が出来ればあの制服の半袖タイプの制作も夢ではないはず、そうすれば、暁も七海も喜ぶんだけどなあ。

まあ、世間には流れない技術が使われているから無理なんだろうけどさ。

準備を済ませ、これからという時。

「ねえ、伊吹君。何か買う?」

不意に大江さんに声を掛けられる。反応して通路に目を向けると、車内販売が来ていた。

ああ、と選ぶが結局は大江さんと同じ物を、お茶を買うことに。勿論、大江さんの分は奢つたよ、別に高い買い物という訳ではないしな。

折角なので、お茶を一口。それからイヤホンを耳に付けると、動画ファイルを再生する。画面には街の景色を背景にした美少女が映し出されていた。

『皆さんには驚逗研究都市をご存じでしょうか？ 驚逗市の東に位置する若い街。アストラルについての最先端研究を行う為に造られた新しい都市です』

中身はどうやら街の紹介映像のようだ。

でも、映し出されるこの街についての説明は動画を見なくしてある程度は親父から事前に聞かされている。そう、文句を言いに顔を出したあの日に。

なのにもう一度見とけつてことは、再確認つてどこか。まあ、分からぬもない、説明が必要な人もいるかもだし、序盤だから必須の展開だろうしな。

二十世紀末期に発見されたアストラル粒子。

その粒子を研究していくことにより、超常的な力とされていたものが、科学的に解明されていった。

そして解明された力、技術を様々な分野で普及させる為、日々研究している施設が存在するということは耳にしている。以前に特班のメンバーがそんな話をしていたことがあつたから。

だが、研究所がある——というよりも街として大規模に存在しているとは予想外だつた。

少女の説明は進んでいく。

『そして、そんな都市の中にあるのがこの建物、橘花学院。この学院では一般課程だけではなく、アストラルについての教育も可能となつています』

『その為、アストラル能力を持つ生徒だけが通う学院と思われてしまふかも知れませんが、勿論、能力を持たない生徒も一緒に学ぶことが可能ですね』

この学院で基礎学力を身に着けながら、身近でアストラルに触れることで理解を深めることが出来る。

これから時代、アストラル技術が発展し、生活の支えになつていくかも知れない。そして必要となつてくる人々、次世代を担う人を育

てるという方針を取つてゐるのが、この橘花学院となつてゐる。

『それでは早速、学園内を歩いて見ましょう』

少女の背景が次々に変わつていく。並び建つ大きな寮。その寮に備え付けられた大浴場に学生が利用する食堂。豪華だ、その一言に尽きる。ここまで立派な学生寮はまずないと思う。

学園の中には授業の為、そして研究データを取る役割も兼ねた大型の屋内プール。一体、予算はどこから回つてくるのだろうか。  
少しどいいから是非特班へ下さい、何でもしますから。あ、やっぱり嘘です。

そんな冗談の最中、画面に映る場所は敷地内から隣接している施設に移動していた。

『この建物が橘花学院に併設されたアストラルの研究施設となります』

外張りが全面ガラス張り。何処かの中学校を彷彿とさせるが……  
関係はないはずだ、うん。俺の思い過ごしな、きっとね。

というか、最新技術の研究施設なのにあんな透け透けでいいのどうか？ デザインの都合上とかなのか？ 気にしたらいけない気がする。

その後は生徒たちの生活風景の紹介がされていった。

寮生活ともなると、門限や外出をする際には手続きなど、細かい決まりが多々あるそう。面倒かも知れないが、必要なこと。

画面は最初に映つた背景に戻る。

『まだ歴史の浅い驚逗研究都市、それに橘花学院。その未来を共に築いていくのは皆さんです。協力して頂けると私も嬉しいです。ここまでのご視聴ありがとうございました。では、最後にこの歌でお別れとしましよう』

締めの台詞の後、曲が流れ始めた。すると、画面に映る少女が歌が始める。この子はアイドルか何かなのだろうか？

あれ、でもこの歌……どつかで聞いたことがある気が――。

「この子の歌、あたしも知つてゐるよ」

大江さんが隣から画面を覗いてくる。不意の出来事に少し驚いて

しまった。

伊吹はイヤホンを外し、視線を画面から大江さんに移す。可笑い  
な、音、漏れて無かつたよな？

「この子つて、有名なんですか？」

「いや、別に有名という程ではないと思うよ？ でもねえ、この女の  
子つていつだつたか……うーん、忘れちゃつたけど、一度ニュースで  
取り上げられたことがあるんだよ。多分、調べてみれば動画くらい  
ネットに上がつていると思うよ？」

「そうなんですか……知らなかつたです。これからのこと、参考まで  
に後で調べて見ますね。今は先にこれの確認をしておきたいのでー  
ー」

紹介動画が終了し、再生画面が自動で閉じる。続いて伊吹は資料  
データの閲覧を開始。

内容としては今回の任務に関してのもの。こちらも事前に聞いて  
いた情報の再確認が主だった。

長期に渡る潜入任務となつたこの案件。曉に七海、そして俺の三人  
が潜入する先は動画でも紹介された場所、橘花学園。あの動画を見せ  
られたのはその関係だ。

資料に目を通していると、再び大江さんの顔が近づく。子供相手だ  
からか、大人の余裕なのか、遠慮のない。この人は自分が美人だつて  
自覚しているのだろうか……。

「この任務の内容、鷺逗市内に犯人がいるんだつけ？」

「ええ、まあ。事件が起きたのがこの都市ですからね。しかも情報に  
よると、学生ときたものですから、この街に暮らす子でほぼ決まりだ  
と思いますよ」

観光目的でこの街を訪れる人は少ない方。それは世の中の偏見も  
あると考えられる。

アストラル技術は便利、有名な物を挙げると車や電車か。粒子をエ  
ネルギーとして動くことから従来の燃料などが不要となる、十分な成  
果だ。

だが、その力を人が扱える、アストラル使いは普通の人間とは違う、

不気味な存在だと好まない人がいるのが現実。

けれど、皆が全員そういう訳ではない。アストラル使いは徐々に社会に受け入れられつつある。

後どれくらい時間が掛かるかは分からぬ。でも、いつかきっと受け入れて貰えるはずだ。その未来を守る為に活動するのが特班の仕事の一つもある。

だから、この案件などは見過ごせないと上は判断したのだろう。「それにしても『偽札』とはねえ、相手の能力はもう判明しているの？」

「それがまだなんですね、判明したら暁たちに連絡がいくはずですし……」

大江さんがこの件にアストラル使いが関わっていると簡単に判断できたのは、俺の見てる資料に書いてあるからだけではない。

この事件が発覚した原因となる『偽札』。写真も当然これに載つている。これを見れば誰だつてそうだと判断出来てしまうさ。

だつて――。

「このただの『紙切れ』、伊吹君はどう見る？」

「普通に考えれば認識系統とか催眠系統じゃないですかね、でも、アストラル能力には種類が多いですから、断定は不可能ですけど」

偽札とされた物は、白い紙に走り書きで雑に一万円と書かれただけの物。

だが、これを持つていた男は「本物だ」と主張しているらしい。他の人は紙にしか見えない――現に俺や大江さんには落書きされた紙にしか見えていない。

となると、直接犯人と接触した男に限定で能力が使用された可能性が大きい。

そして、伊吹が断定が出来ないと言つたのには理由があつた。

人にはそれぞれ個性があるように、アストラル能力にも似て違った存在することが分かっている。全く同じという能力を見つけることは不可能に近いとされているのだ。

例えば、空を飛ぶという能力があつたとしよう。だがそれは重力を

操り浮遊するのと、念動力で体を浮かすのでは、『結果』は同じでも

『過程』が全く違うことになる。

だから、使われた能力を断定することは難しいのだ。

「偽札を入手した経緯が持っていた男のカツアゲですし……相手が学生なのも男の証言から確定します。顔は同じように能力を掛けられていて朧気にしか思い出せないらしいですが、制服まで気が回らなかつたのでしょうか？」

犯人と思われる人物は一人、それも証言から。

制服を着用していたとなれば相手は学生。更に、学生がいる場所は街の一カ所に絞られる——そう、橘花学院だ。

だからこそ潜入任務。

生徒として編入し、犯人を捜し出す。それが俺ら兄妹に任せられた仕事。特班のメンバーであり、学生でもある三人には適任なのだ。

最後の資料まで一通り確認し終えた頃。

一時間ほど経ったか、車内にアナウンスが流れた。鷺逗研究都市に間もなく到着することのこと。

タブレットの電源を消し、降車の準備を始める。

数分もすれば、電車は減速していき、やがて停車した。

「じゃあね、あたしはこっちだから。頑張るんだよ」

大江さんと降りた駅で別れる。大江さんの用事は俺とは反対方向だそうだ。特に大きな荷物もない所を見るに、俺たちのような長期的な任務ではないのかな。

改札口に歩いていく大江さんを見送りながら、伊吹は新たな切符を買いに向かうことに。

この駅から橘花学園に行くには乗り換えをしなければならない。ここからライトレールに乗り移動する。路面電車と言えば分かりやすいかな？

目的となる駅は既に確認済み。なんと学園の真ん前に駅があるんだけど、驚きだつた。

だが、俺の編入予定は明日からになつていて。何をする為に向かうのか？ 理由は単純、潜入済みの弟へ素敵なお届け物をする為さ。

さて、また電車に揺れますかな。

## Chapter. 0-18

『橘花学園前、橘花学園前。お忘れ物のありませんようお気を付けて下さい――』

揺られる電車内に流れるアナウンス。

車窓から街の景色を眺めていたらいつの間にか到着していたらしい。

空いていた車内では、ゆつたりと座つて過ごすことが出来た。席を立ち、足元に置いていた鞄を持ち直す。

徐々に速度が落ちていき、停まつた反動で体が少し流れる。空気の抜ける音、開かれた扉から駅へと降りた。

‥。

‥‥‥。

学園前と言つても歩くには歩く、ほんの数分だがな。

次第に見えてくる綺麗な建物——あれが橘花学園か‥‥。うーん、校門らしき所にそう書いてあるのだから合っているのだろう。

きつと疑つてしまつたのは“あれ”的せいで、門の前に立つ数人の守衛と思われる大人たち。

紹介映像でも映されていた研究施設がこの学院に併設されている為か、警備が敷かれているらしいな、それもかなり厳重に。

敷地内を囲いの外から覗いただけでも、数台の監視カメラや感知センサー発生装置の類いが隠されるように設置されている。

普通ならここまで厳重に守られていることはまずないと思う。それほどまでに、アストラルに関しての研究は特別だということだ。  
「アストラル技術は便利、か‥‥差違を認めずにな」

伊吹は門の前を通る。

その時、守衛さん方が無言でこちらを監視するように見てくるが、平然と受け流して歩いていく。

親父の話だと昨日の内に、この素敵な“プレゼント”を渡す相手は既に潜入済み。

先ほど密かに連絡も取った、特班で使用される特殊な通信を使用して。

俺はまだこここの生徒ではないから、これより先に入ることは出来ない。渡すとなるなら学外で接触するしか方法がない。それも怪しまれずにな……そこで、だ。

この学院の近くにはコンビニが一軒ある——そう情報を貰った。俺は今そこに向かっているのだ。コンビニが渡す為の待ち合わせ場所。

道を渡つて反対側から回るように通れば、別に学院の前、守衛の前を通る必要はない。だが、態々こうして学院の前を通つたのには、理由が……というほど大層なものではないか。単に潜入場所を一目見ておきたかったからっていうだけのこと。

「(この程度の警備なら、七海の技術で無力化は余裕そうだな。暁も問題ないだろう)」

校門を過ぎた後も、流し目で学院の敷地内を見ていながらそんなことを思う。

暁は俺と同じだが、七海は違う。現場で仕事をする実働班ではない。基本的には後方で手助けを行うサポート要員。

そして、七海が得意としているものの一つがああいつた警備システムの無力化に制御の奪取。潜入時に偽の映像を流して道を確保したり、逆に映像を見ることが出来る。

これは決して本人が望んで身に付けた能力ではない。それだけに、家族、そして兄としては使う必要のない平穏な生活をさせて上げたかつたんだけど……。

学院の側から離れてすぐのこと、コンビニが見えてきた。ちらほらと学生の姿がある。

俺もそうだったが、生徒は下校していても可笑しくない時間帯だ、当たり前と言えばその誰かも知れない。

おそらくは寮に持ち込み可能な飲食物、お菓子や飲み物を買い込みに来ているのだろう。暁もその体で外出届けを出すつて言つてたからな。

まだ暁の姿は見えないが、先に店の中に入つていく。買う物は今晩の夕飯。

学院にまだ入れない以上、寮にも入れないということ。つまりはその辺のホテルか何処かで一晩過ごせつていうことが必然となる。

親父、覚えていろよ……。

コンビニ弁当とお茶にアイス、雑誌も一つ購入。ビニール袋を持って店から出る。

袋からアイスだけを取り出し、人を待ちながら黙々と食べていた。  
「…………。ん？　お、来た来た」

通つて来た道、学院からの道を歩いてくる人物が一人。目つきが悪くて、前髪も長い。いかにも無愛想な雰囲気の男の子。あれが我が弟、在原暁。ちゃんと学院に馴染めているのか不安になつてくるんだが——まず置いておこう。

一瞥すると、あちらもこちらに気が付いたらしい。

人気がなければ、声を掛けて直接渡したいところなのだが、お生憎に時間帯が時間帯だ。他生徒の目や帰宅途中の大人の目もある。

目の前を通る際、軽く目配せをすると、暁はコンビニへ入り適当に何か買い始めていた。

その様子を確認しながら伊吹は今の内に準備する。暁はパンやスナック菓子と数本の飲料水を買うと数分で出てきた。

お互に他人の振り、顔を合わせる素振りさえ見せない。傍からみても違和感はないだろう。

暁は寮に戻る為、来た道を帰る。

伊吹は街中に向かう為、反対の道に歩く。

再びすれ違う時、伊吹の手が暁の手に下がるビニール袋へ動いた。それはもう文字通り、目にも止まらぬ速度で。手の内に隠すように準備していた“例の物”、それに追加で雑誌を一冊を丸めてな。

その後、暁の姿は見えなくなり、俺も街の中に。

その頃、腰の辺りで端末が震え出した。携帯の方ではない、秘匿回線。

適当な路地に姿を隠すと通話を開く。

『——問題はないか、暁』

『……大丈夫だ、あれなら怪しまれることはないとと思う。寧ろ、あそこまで気をつけなくても普通に渡してくれて良かったのに』

『念のためだ、念のため』

微笑を漏らす伊吹。笑った声が暁にも聞こえたのか向こうからも聞こえてくる。

『それで、これが例の物?』

『そうだな、使い方は……ちょっと待つてろ……』

通信をそのままに違う画面に切り替える。

親父から送られてきた資料を開く。確かにこの辺に説明が書いてあつたはず、ああ、あつたあつた。

『えーっと、対象者に直接貼り付けて……数時間後に回収すること、だつて。ああ、直接つてあれだぞ? 衣服の上じやなくて素肌に貼らないと意味ないって』

『難易度高くないか、それ……』

『俺は知らん。その辺はお前に任せるつもりだからな』

『ええ……』

もし言われたとしたら俺も同じ反応をするとと思う。が、しかし、渡した時点で暁の役目なのだ。言葉通り俺は任せるだけ。

『七海に押しつけたりするなよ?』

『いや、それは流石にしないけど……』

『そんじゃ、任せたぞー』

語尾を伸ばしつつ通話を切ろうとする伊吹。

耳から受話口を離そうとしていたが、暁の声がまだ雑音のように小さく漏れていたので、切らずに耳元に戻してみる。

『——のそういう所にはもう慣れたけどさ……。後、聞いておきたいんだけど、一緒に入れた雑誌つて何?』

『ああ、寮生活では必需品なんだろ? 親父が言つてた物だ。優しい兄の奢りだぞ、素直に受け取つておけ、な?』

『必需品つて……月刊バタ足ミル——つて! これエ〇本じゃ——』  
暁の声が途中で途切れる。

伊吹が通信を一方的に切つたせい。

さて、当初の目的はこれで果たした。後はいつ作戦が開始されるか待つだけ。

今日の内に俺が出来ることはまずないと思う……まあ、リスクを気にしなければあるにはあるのだが、やめておこう、無理はよくない。特に今回の潜入任務には妹も参加していることだしな。

端末を仕舞い、路地を後にする。

伊吹は今晚の宿を探しに向かうことにしていた。

## Chapter. 0-9

今晚の宿はビジネスホテルで安く済ませることに決めた。ただの素泊まり。エレベーターで階を上がりつていき、受付で渡された鍵を使つて部屋の中に入る。

ベッドにデスク、浴槽とトイレが同じ場所。任務で利用することが多いからか、もう見慣れた内装。デスクの横に手荷物をドサツと置き、ベッドに腰を下ろすと一息ついた。

携帯と仕事用の携帯をポツケから出し、脇のサイドテーブルに。窓から見える景色は夕焼けの空。ライトトレールから眺めていた時にも思ったのだが、この驚逗研究都市は意外にも開発が進んでいる。街並みはビルなどの近代的な造りの建物が多い。それ以外にも綺麗な建物ばかり、例えを上げれば橘花学院とかか。

建ち並ぶガラス張りのビルの外観に日が反射して、光が部屋まで差し込んでくる。今日という一日の終わりが近づいているような感覚。今日はバタバタとして疲れたな。通っていた学校を辞めて、電車での移動の連続。仕事以外でここまで詰めた予定を組み、動いたのは久しぶりだった。

ふと、備え付けの電子時計に目をやると、そこそこの時間。ベッドから立ち、デスクに向かう。買ってきたコンビニ弁当を広げ、箸を手に取つていた。

何から食べようかと思った矢先、小刻みに音が鳴る。置いていた端末が会いたくて震えていた。椅子から立ち上がり、それを手に取る。また秘匿回線。まあ一般回線、普通の携帯が鳴る方が珍しいんだけどな……。

「えつーと、このコードは暁からか」

画面を操作し、回線を開く。

『ほいほい、どうかした?』

相変わらずの受け方。暁や七海、親父は慣れたと言つている。

暁には例の物をしつかり渡したし、生命の魔道書も渡した。今日の必要な連絡はもう無いと思っていたんだが……。

『例の物の準備が出来た。まあ、色々と問題はあつたんだけどな……』  
『おお、仕事が早いな。難度が高いとか言つてた割によ』

例の物、親父から頼まれた特注品。

特班の制服にも採用されている素材、メモリーエンジニアード繊維を加工した小さく薄くシール状の物。

——メモリー繊維。

その名の通り“記憶”するという特性を持つた特殊繊維だ。アストラル技術の発展で生まれた代物の一つ。

特殊な加工を施すことにより、アストラル能力を吸収。更に加工を加えることで、その能力を定着させておくことが可能。

吸収させ、記憶した能力は本人でなくとも使用可能となり、特班の制服を使われている理由もそこが大きい。

性能の高さから、当然のように値も張る。グラム単位で金より高いとかなんとか。

そんな高級品が惜しげもなくふんだんに使用されているのだ、特班の制服はおいそれと量産することの出来ない物となつた。その為、半袖が欲しいという暁の提案は未だに通つていらない。

今回、特別に開発されたシート版は、元々開発部の方で案が出ていた物なのだとか。

試作品と現場での運用試験も兼ねて、この任務での投入が決まったのだろう。

相手の素肌に数時間も直接貼り付けなければ効果を發揮しないなどと、問題点は多々あるが、性能は十分に高い。ただ、リスクの高さとすれば、潜入には向かないけどな。

吸収した能力を保持していられる時間、効力はもつて一日か二日とのこと。実際の所は正確には分からぬ。

なら、確実に効果が残っている状態である今夜か明晚か。  
『任務開始予定はいつにしたんだ?』

『今夜にした。本当は伊吹兄さんが編入してから行動する予定だったんだけど、ちょっと問題が発生していてな……』

『……問題?』

『親父からこの街の紹介映像みたいなやつを見せられただろ？　あれに映つていた女の子、覚えてるか？』

電車で見た映像を思い出す。映つていた女の子は一人だけだった。

『確かに、何かのテレビに取り上げられたりがあるっていう子のこと？』

暁が見た映像と同じものという確証はないが、親父からとなれば多分同一のはず。なら、大江さんが言つていたあの子のことだろう。

『ああ、その子で合つてる、胸の大きい子な。テレビに出ていたつてのは、俺も七海に教えて貰うまで知らなかつたけど』

『それで、あの子がどう関係しているんだ？』

『俺と七海が編入する前日にあの子のファンだつて名乗る男が夜の学院に侵入してな、警備の強化が掛かるらしいんだ。今夜にも人手の方は増えていると思う』

それは可笑しい。ホテルに来る前、暁と接触する前にこの目で確認したんだ。そこの施設より何倍も厳重な警備だつたはず。

『当然、浮かぶ疑問となると――』

『あの中を一般人が？　どつかの組織の工作員とかじゃなくてか？』

『まあ、俺もその線を疑つてこつそり調べてみたんだが、本当に一般人だつた』

機器関係が苦手な暁のことだ、自身の能力で盗聴まがいの方法を取つたのだろう。そういう情報収集に関しては上手くなつたものだなど感心する。

実動班からすれば、現場での生きた情報集めが出来るメンバーがいるのはとても有り難いもの。

『そいつが言うには、全く面識もない、知らない人物から情報が送られてきたんだと。情報通りに指定された時間で指定されたルートを使つて学院に侵入。すると、何故か学院の警報装置は機能しないし、その付近には警備員の姿もなかつたと言つていいらしいんだ』

『だが、偶然にも通りかかつた学院の先生に見つかり、事態が発覚して確保された。その夜は他に怪しい人物は目撃されていないし、監視力メラにも問題はなし。研究施設や校舎にも侵入された形跡はないら

しく、謎だけが残った状態。依然、装置が機能しなくなつた原因は分かつてないんだとさ』

『……うーん。なら、早めにやらないといけないな、色々と。そつちの方は俺の方でもう少し調べてみる。兎に角、今夜は自分の役割に専念してくれ』

暁から「ああ」と返つてくる。

一度侵入された、しかも原因が分からないともなれば、警備の目は無意識にも“外”に向く。悪いが、俺たちには好都合だつた。

それに、その男の話が事実なのだとしたら、編入する前の方が都合がいい。生徒ではない内の方が動きやすい場合もある。

『もう敷地内と校舎内の監視は把握済みだよな?』

『ああ、それは大丈夫。七海も既に“仕込み”を終わらせたつて言つてたし』

暁は置いておいて、流石は我が妹、七海ちゃん。あの台数に対しての“仕込み”をたつた一日で済ませるとはな。複雑な心境にはなるけどね。

『じゃあ、この端末に敷地の見取り図と警報装置の設置箇所、作戦開始時刻に侵入経路も送つといってくれ』

『分かつた、七海に伝えとく。ああ、それと——いや、やつぱりいいか……』

『なんだよ、勿体振るなよ。気になるだろ?』

伊吹がそう返すと、少し間を空けて暁が答える。

『潜入前、七海が伊吹兄さんに応援要請した任務があつただろ? その後、七海に会いに行くからな的なこと言つたんだつて? なのに怒られるのが怖いからつて帰つた』

『ああ、そうだつたな……っ! ま、まさか——』

『次の日、食卓には餃子が並んだ、それだけは伝えておく』  
『おう……マジですかい……』

そこまで聞いて、通信を切つていた。

この件は編入してからが怖いが、今は任務に頭を切り替えよう。こればかりは失敗は許されない。

一度でもミスをし、発見でもされてしまえば、潜入は露見し、事件調査の機会は失われる。再度の潜入も厳しくなることだろう。

それに、七海にも危険が及んでしまう可能性がとても高い。兄としてそれは避けたい。

端末がまた小刻みに数度震える。データが送信されてきたらしい。頼んでいた項目を一つ一つ分けて丁寧に。まずは見取り図を開いて、目を通す。

お預けとなつた夕飯は一旦蓋をする。携帯食料で我慢しよう。最悪、今夜に食べられなかつたら朝食にしてもいいだろうしな。

デスクの横、床に置いていた荷物を開け、詰めていた荷物を全部取り出す。中身のなくなつた鞄の底板に伊吹は手を伸ばしていた。

四隅を最極小の金具で固定した二重底。金具を特殊工具を使用して外す。そこには、しつかりと折畳まれた特班の制服と道具の一式が入つていた。その下に本当の底板が存在する。こうして隠し持つておくのは念の為。秘密組織ですからね。

着ていた服をベッドに放り、制服を身に着ける。耳には小型通信機を引っ掛ける。最近は単独任務が多くなつていたせいか、機会がありなかつたな。

部屋の窓を開ける。

通話をしている間に日は落ちて、月明かりと螢光色が街を彩つていた。ああ、今夜は夜風が涼しいな、この間の熱帯夜とは格別だ。

制服に備え付けられている機能、メモリー繊維に記憶されている迷彩能力を起動する。窓の縁を蹴り、そのまま夜の街、夜の橘花学園へと向かつていった。

# Chapter. 0—10

場所は移り、橘花学園が遠目で視認可能な近場のビル、そこの屋上。空調設備や他の設備が大半の幅を占める場所。よくドラマやアニメで見る屋上とは訳が違う。人の出入りなどまぎない。

そこそこに気持ちがいい夜風へ当たりながら、伊吹は適当に数本持ってきた非常食を嚙つて、暗視双眼鏡で偵察中。耳についた通信機に、潜入している暁たちから開始の合図があるまでここで待機しているところ。

ホテルを出てから数時間が経過していた、夜の暗さも深みを増す。時間も時間、学園の敷地内には、警備員の懷中電灯が散見しているのが遠くからでも確認できた。

『こちらレヴィ6、今レヴィ9と寮を出た。迷彩効果で付近に潜伏中。こちらの準備は完了、レヴィ0の到着次第、作戦を開始する』

『ほい、レヴィ0了解。……なあ、レヴィ9の……その、機嫌は?』

『……』

無言。それだけで大方は把握。

『……うん、分かった。今から移動する。後でまた連絡するよ』

『……ああ』

通信を切る。迷彩効果を再起動。

任務に集中、集中、集中、うん……。表には出さず、胸中で呟き自分で言い聞かせて。

屋上から下りる。体が浮き上がる。まるで風に乗るかのように、夜空へ向かつて行つた。

†

人は見慣れてしまつた景色を注意深く見入ることはなくなつていくもの。こんなにも綺麗な夜空を見上げている者は、はたしてどれ程いるのだろうか。

街の上に広がる暗闇の世界を歪めながら一つの点が移動していく。

微かな変化だ、よくよくと見ないと分からぬほどの些細なもの。

特班の制服、メモリー纖維が機能させる迷彩能力。自身に当たる周囲の光を屈折させ、背後へと流すことにより、まるで体が透過してい るような状態にすることが、記憶させているアストラル能力の効果。

迷彩能力とはいうものの、流石に完全とまではいかないのだが、殆ど肉眼での判別は不可能な領域。夜の中、暗闇となると尚更に。

背景と調和した姿は視覚系統のアストラル使いや特殊な器械を使 用しない限り視認することは困難。

一方、移動方法である飛行を可能にしているのは伊吹自身のアスト ラル能力、その応用。学園の囲い塀を難なくと越えていく、警報機は 反応しない。鳴ることはなかつた。

遙か上空から降り立つ人影は、橘花学園の敷地が一望出来る高所へ と。警報装置が機能しない高度、範囲外からの飛来。迷彩効果も相 まつてか容易に侵入が出来た。

本当に大丈夫なのかな、こここの警備……だから巨乳ファンの男にも 簡単に入られてしまうのでは? ……なんてな。アストラル使いが 特殊なだけか。

事前に予定し、二人に伝えていた地点。周囲を一度見回し、辺りに 人の気配がないことを確認すると、耳に手を当てて通信を繋ぐ。

『こちらレビュー0。予定ポイントに到着、行動を開始するよ』

『レビュー6、了解。作戦を開始する。現在地をレビュー9がそつちに送 るから確認してくれ』

通信端末、タブレットの画面を開く。送られてきたデータを読み込 むと、敷地内の見取り図にレビュー6とレビュー9の現在地が赤い点で表 示される。

「確認した」と答えると、二つの点は徐々に動き出す。少し動いては止 まり、また少し動いては止まるを数度繰り返していく。

敷地内に隠すように設置された警報装置を避けていく動作だ。場 所によつてはレビュー9の手助けを借り、レビュー6の能力で通過したり と。

やがて二つの点は一つの建物の前で止まる。そこは橘花学園の校

舍入り口。

二人がすぐに中へと入らず待機しているのは、レビイ9が内部の警備装置を一時的に無効化しているからだろう。『仕込み』は済ませているとは言っていたから、時間は掛からないはず。

今回の作戦での役割。レビイ6とレビイ9は校舎内に忍び込み、目的の部屋に例のシートを使用して入る。そこで、特班が求めている情報入手すること。

レビイ0はそのサポート。周囲の警戒、もしもの場合、二人への脅威を退ける役目。

それぞれが持つ能力を生かした配置、適材適所っていうやつだな。

レビイ9が『仕込み』を起こしている間、レビイ0も動く。

小型カメラを数台取り出すと、その全てを宙に放る。意識を集中させると、球体型をしたカメラは落下することなく、ゆらゆらとその場で漂う。

タブレットで設定画面を開くと、反応したカメラが起動していく。それぞれのカメラが捉えている映像が画面に次々と表示された。

まあ、レンズが全部こっち向いているから俺の姿ばかり映つていいんだけど。赤外線モード、暗視モードの切り替えも良好、問題なし。——ではでは、いきますか。

動作確認を終えた伊吹はカメラに向けていた意識を強める。すると、静かに動き出し、高速で散り散りに飛んでいく。

この場所から死角となっている場所、二人の撤収ルート。校舎の周り、奔放なのが一台。所定の位置に着き、映像が送られてくる。人影は見えない。今の所は大丈夫かな。

こちらの準備は完了した。さて、二人はどうだろうか？

『レビイ6、レビイ9、共に侵入成功。校舎内に人の気配はなし。これより目標へ向かう』

『了解。こつちも特に異常はないよ、接近する人影も今の所はない。とはいって、あまり時間は掛けられないからな、レビイ6の迅速な任務

遂行を推奨しまーす』

『……レビイ9は?』

『レビイ9は心配ないし、優秀だし、可愛いし、可愛いし、可愛いし?』

『……。通信終了』

通信が切れる最後、小さく溜息が聞こえたような気もしたが、そのまま受け流す。

それに、時間が少ないので事実。警報装置を無力化しておけるのも有限だ。特にこここの施設のような厳重なものとなると尚更。

二人の位置を見ながら、カメラの映像にも目を配らせる。順調にレビュー6たちは建物内を移動している。昼間の内に最短経路は調べていたのだろう。

警報装置、内部の監視カメラ等は無効化されている、足止めをくらうこともないしな。

「(この調子なら一分も掛からないか)——うん?」  
こちらのカメラに人影が映り込んだ。二つの影。

「(警備員の服装じやない……学園の関係者がこんな時間に?)」

私服を着た大人の女性に、アイドルが着ていそうな衣装を身に纏う少女。

女性の方は知らないが、少女の方はどこかで見たことがある顔だった。

「(うーん……。ああ、確か——)」

電車の中で見た映像。あの時と服装も同じ。映像に映つていた子でまず間違いないだろう。そうなるとだ、この子が話に出ていた狙われた子なのか。

レビュー6、暁が任務開始前に言つていたことを思い出す。暁と七海が編入して間もない頃、ファンを名乗る男が学園の敷地内に侵入した事件。

念のため、カメラの一台をこの少女が映るように意識する。残りの台数でも自身の役割に支障は出ない。今はこの少女が妙に気に掛けた、ただの勘なんだけども。

だが、特にこれといった事もなく、静かに時間は過ぎていく。少女

もあのまま寮に帰るところみたいだつた。

先生は付き添いつてどころかな。あんな出来事があつた後だ、一人で帰すことに不安があるのは当たり前。時間も時間だしな。

念のためにと注意はしていたが、杞憂だつたか。他にも特に変化はない。この二人以降は、相変わらず人影もないし、校舎に近づく気配もない。

やはり、無意識に外へ警戒が向いているのかな？

まあ、このまま何事も事が運べば、こちらとしては有り難い。

『目的の部屋に侵入成功、これから情報の入手に移る』

レヴィ6から通信が入る。あちらも問題はなかつたようだつた。

# Chapter. 0-1-1

橘花学院に通じる中庭の道を進む。

隠れ、立ち止まり、隠れて、止まり。様子を見つつ、突破していく。監視カメラや赤外線センサー類いの回避は苦ではない、慣れたもの。だが、レビイ9はあまり慣れていない。姿勢を低く屈んだり、その体勢のまま小走りしたりと、カメラの可動範囲に入らないよう移動する為、腰が痛いと呟いてはいたが。

中庭に校舎の周辺。巡回する警備員の姿が見えたが、特班の制服による迷彩効果により、これは大した問題とはならない。ここまで俺の領分だ。けど――。

「……」

最初の目的の建物である学院の校舎へと無事に到着した。

巡回の警備員は他の場所へ。暫くは戻つてはこないだろう。それに、この周辺はレビイ0が見張っている。何か予定外のことが起きたとしても、レビイ9が一緒にいるのだ、本気で何とか対処してくれるに違いない。

「……あと少し……」

レビイ6の前でレビイ9は、手に持つタブレットの青白い光に顔を照らされながら、慣れた手つきで手早く操作していく。接続される先は内部の警報装置に繋がる操作盤。

正直、レビイ6にはレビイ9が何をしているのかは分かつていな。電子機器関係はさっぱりだ。パソコンも報告書を書くことと、たまに動画を見ることしかしないし、ゲームもあまりしないからな……。

「――うん、これで大丈夫だよ。そんなに厳重なセキュリティじゃなければ、念のため。三分間だけ誤魔化してる。もう少し必要だつたかな？」

作業を開始して一分にも満たない。操作を止めたレビイ9が振り

向き、声を掛けてきた。

「いや、それだけあれば十分だ。よし、中に入るぞ」

周囲を警戒しつつ、ドアを開けて二人は侵入する。通つたことのある道のはずなのに、登校する時とは違う感覚。

ドアを閉め、怪しまれないようにレビイ9がロツクを掛ける。レビイ6はその間に自身の能力を発動。感覚を研ぎ澄ましていく。

自分たちが出す音以外がしないか、建物内部の様子を把握。……問題は無さそうだった。

『レビイ6、レビイ9、共に侵入成功。校舎内に人の気配はなし。これより目標へ向かう』

レビイ0へ通信を送るレビイ6。手短に二言三言と言葉を交わすと、何を言われたのか、苦笑いを浮かべ、次には無言で通信を切つていた。

「……どうかしたの？ レビイ0が何か言つてた？」

「ああ、あんまり時間を掛けるなよつてさ。それとレビイ9は優秀、可愛いつて連呼してた」

「ふ、ふえっ！ ななな、なんで!?」

「いや、俺は知らないけど……。それよりもほら、時間が惜しい。さつきと行くぞ」

「う、うん」

何故か頬を赤らめているレビイ9を抱えると、レビイ6は走り出した。

レビイ6は自身の能力の効力を変更。次は感覚ではなく身体能力、筋力を上昇させる。

階段を飛ばして登り、廊下を音を立てずに素早く駆けていく。

昼間に経路は記憶済み、迷うことはない。最短経路で向かい、一分程で目的の部屋に到着していた。

「さてと、ここからが重要だな」

レビイ6はシートを取り出した。それを目の前の前の部屋の開閉装置となっているセンサーにかざす。特殊な鍵を開ける為に作られた特殊なシート。

今回の目的となっているこの部屋は、アストラルに関する研究室。その為か、使用されている鍵はアストラル技術を組み込んだ最新技術

を採用している。

初めてこの部屋に訪れたのは編入した日だった。その際に部屋を使用している人から聞いた話。この鍵は登録した本人のアストラル能力に反応し、開く仕様になつてゐること。それを知らなかつたら、この作戦を思いつくことはなかつただろう。

「……反応しないな、失敗したのか？」

待つても解錠されない。記憶させる条件は満たしていたはずだが……。

「ちゃんと記憶出来なかつたのかな？ もし、そうだとしたらわたしの苦労が……思い出しだけでも、ううつ……」

諦めにも似た声が出てしまう。まあ、レビイ9の苦労を考えると仕方がないのかも知れないが。何があつたかは、後々に。レビイ0に怒られなきやいいけどな。

鍵が開かないのあれば、これ以上作戦を継続することは不可能。校舎内の警報装置を誤魔化していられる時間も数分しか残されていない。

「一旦、出直すか」

レビイ6の提案にレビイ9も頷く。そして、二人が踵を返そうとした時。

——力チャヤリ

ドアが解錠された音が聞こえてきた。

一度二人は顔を見合わせる。その後、レビイ6がドアにゆっくりと触れてみると、すんなりと開いた。

「しっかりと機能して いたみたいだな、よかつた」

「うん、そうみたいだね。よかつたー、わたしの苦労が無駄にならなくて」

部屋に入ると、当たり前に人の気配はなかつた。閉めたドアにも鍵を掛ける。一応部屋の窓から外を確認するが、周囲にも人の姿は見えない。

「問題はないな、データを回収してさつさと撤収しよう」

「もうやつてる。ツールを走らせてるから焦つたつて早くなる訳じやない。

ないよ。……よし、入れた。えーと……これはどこから検索すればいいのかな……」

レヴィイ9は既に部屋に備え付けられたパソコンの前にいた。手元にはいつものタブレット。そこからパソコンに掛けられたロツクを外すツールというものを使っているらしい。

問題なくロツクを外したレヴィイ9は、パソコンを操作していく。そして、目的のサーバーへの道を見つけるとアクセスする。そこが“AIMS”だ。

AIMS——Ability·Information·Management·System。

その名の通り、アストラル使いの情報を管理している場所。

この鷺逗研究都市に暮らす者はこのAIMSに登録することになつていて。勿論、編入してきた俺や七海も登録の手続きをした。この部屋に入つたもの、その手続きがあつたからだ。

鷺逗研究都市のアストラル使いが全員登録されているつまりは、追つている事件の犯人も登録されているということ。

アストラル技術の研究に必要な能力を持つ人物を探しやすくする為、能力別に検索をかけると、カテゴリーが分かれ、知りたい情報を絞ることが可能だつた。本来の使い方でも、便利なもの。今回はこちらの用で有り難く利用させて貰うとしよう。

「調べる能力は認識阻害でいいんだよね？」

レヴィイ9の問い掛けに頷くレヴィイ6。

これは事前に室長から連絡を受けていた。偽札の事件、最初は催眠能力か認識系の能力なのか判断を決めかねていた。

だが、所持していた人物のみが本物と認識し、相手の特徴も一部だが記憶していたことから、犯人の能力は認識阻害でほぼ確定となつた。

「どうだ、いたか？」

「うん、二人いたよ。これからデータのコピーを始めるからもう少し待つてて」

事件に関係のありそうな二人の人物のデータをコピーしていく。

レビイ9の話では、数分も掛からないらしい。

完了するまでは特にやることもないのに、警戒も兼ねて窓から外を眺めることにした。

「……ねえ、暁君」

「作戦中はダメだぞ。……どうかしたか？」

タブレットに視線を落としたまま、レビイ9が少し躊躇うように尋ねてくる。

「さ……レビイ6はレビイ0に会つてるよね？ 編入する前の任務の時も、あのシートを受け取りに行つた時にも」

「まあ、そうだな」

「その……何か変わつてたりつてしてたかな？ べ、別に気になるとかじやなくて、い、妹として兄の一人暮らしが心配なだけであつて、瘦せていたとかそういうことが……ね？」

「別に何も変わつてなかつたと思うけどな。ああ、そつか。最後に直接会つたのつて正月に帰つてきた時が最後だつたつけ？ なら、半年も会つてないことになるのか」

この間もそうちつたが、レビイ9とレビイ0は、最近では通信で何回か声を交わした程度。姿はお互いに見ていなかつた。

でも、別にレビイ0は遠くに住んでいる訳ではない。徒歩でも会いに行こうとすれば、行ける距離の範囲。

「会いたかつたら、家に遊びに行けばよかつただろ？」

「だつて、忙しそうだつたし……。あの時期、レビイ0は大きな事件を追つていたからね、連絡もなかなか出来なかつたよ……」

寂しそうにレビイ9は答える。レビイ0は俺らが所属するかなり前から特班で活動していた。現場での経験や実力はトップクラス。任される任務の難度的にも同じ作戦にあたることは少なかつた。

現場で活動する俺よりも後方でサポートをするレビイ9なら尚更、その機会は減つてしまふ。

「だから、同じ学校に通えるのが嬉しいんだよね。朝になれば兄さんも編入してくるし、遅くなつてもお昼には会えるんだもん。えへへ、楽しみだなあ」

レビイ9は気づいているのか分からぬが、自然と表情は緩んでいた。

「……もう怒つてないのか？」

「えつ、どうして？わたし怒つてた？」

「いや、だつてこの前餃子を——」

そこまで、レビイ6の言葉は遮られた。緊張感が薄れてかけていた二人には、気を引き締め直すことに。

遮った音、それは学院の敷地内で鳴る大きな警報だった。

「け、警報!? ななんなんで!? わたし何かミスしちやつた!? どうどうしよう暁君! どうしよう! 助けて伊吹お兄ちゃん!」「まず落ち着け、この警報は俺らじやない。……外からだ」「そ、そうなの? よ、よかつた。……でも、どうして警報が鳴つたんだろ?」

突然のことで慌てふためくレビイ9と冷静なレビイ6。個人差はあるのだろうが、これは経験の違いだと思う。現場でのイレギュラーは別にそんな珍しくはないからな。

校舎内、建物からでは状況が把握できない為、レビイ6は通信を送る。

『こちらレビイ6。この警報は?』

この事態を把握していると思われる人物。周囲の様子に敷地内の警戒を行っているレビイ0なら、警報に対して既に何らかの行動を起こしているはず。

『ああ、どうやら“お客様”が来店したみたいだね、俺たち以外のがな。今、カメラで追つてることろだ。もう巡回の警備員たちも集まつて來てるよ』

『どこかの組織か?』

『うーん、まだ分からん。見た感じ、動きは素人っぽいし……。またどつかの誰かに唆された金目的の輩かも知れないな』

この間のファン侵入の件もある。今回も何者かによる仕業の可能性も捨てきれない。捨て駒として利用し、何かを探っているのか?

『とにかく俺は現場に向かってみる。校舎周辺と撤収ルートに問題はないから、お前はレビイ9を連れて一先ず寮に戻れ。レビイ9の安全が最優先、いいな? 送り届けた後、可能ならお前はこっちに来い』

『ああ、分かった。気をつけろよ』

どちらからともなく通信を切ると、レビイ9がデータのコピーを終えていた。慌てながらでもしつかりと仕事はする。レビイ0が言う通り優秀なのは間違いない。

「兄さん——レビイ0はどうするつて?」

「現場に向かうつて。俺たちはその間に撤収するぞ、目的も達成したしな」

「うん、分かった。あ、でも、もうちょっとだけ待つて。痕跡が残つてないか確認するから。ちゃんと消えてると思うけど、念のためにね」操作し、パソコンの画面が数度切り替わる。正直、何を確認しているのかさっぱりだつたが、何も問題はなかつたのだろう、殆ど時間を掛けずに電源を切つっていた。

部屋を後にする前に、レビイ9が再び警報装置を誤魔化す。その隙に校舎内から出ると、寮への撤収ルートを急いだ。

†

警戒に最適だつた所定の位置を離れ、カメラを操り、目標の姿を捉えながら、敷地内の建物の上を次々に移動していくレビイ0。

数分もかからずに現場付近の建物に到着すると、気付かれないうにカメラを近づけていき、状況を窺うことに。

「(えーっと……どうなつてんのかな?)」

映像を確認。二人組の男が昼間に見た守衛たちと対峙していた。どうやら『お客様』は二人。顔を隠すように深々と被った帽子に、上下を黒い服装で身を包む連中。

目的は分からぬ。だけど、ここに侵入して来たということを考えると、アストラル関連のことだろうと予想は出来た。だが、奴らはその“何か”をする前に守衛に取り囲まれた。その時点で手練れではないことは確かだ。動きが雑過ぎる。

その程度の相手のはず。なのに守衛は構えているわりには確保へ動かない。互いに一定の距離を維持したまま。渋つているのは何故だろうか?

そんな疑問を映像越しに抱くが、カメラをもう少し潜り込ませ、映像を拡大させると、その答えに気が付いた。それはとても簡単なこと。

「(この感じ……アイツら、アストラル使いか)」

それは特有の匂い。経験から感じ取れるもの。それに対し、ここの守衛たちはアストラル使いではない。下手に対処すれば、逃走されてしまう恐れもある。それに負傷者も。

確認を終えたカメラを手元に戻す。そして、レビイ0は迷彩機能を起動させると、屋上から現場に降り立つた。

次はカメラではなく、自分自身が守衛たちの間を縫いながら相手に近づいていく。認識系統のアストラル使いでもない限り、この暗がりでは視認は容易ではない。

アストラル使いの対処はアストラル使いが。手元に戻していったカメラを近くの茂みに放ると、能力で操作。ガザガザと草を搔き分ける音を立て始める。

その場の全員の注意が一瞬そちらに逸れた。一瞬、それで十分。

レビイ0は、簡単に相手の懷へと潜り込むと、強めに掌底を鳩尾に一線。一人目が苦痛の声を漏らし、その場に崩れ落ちた。

何が起きたのか理解できていないもう一人と取り囲む警備員たち。その硬直した隙に間合いを一気に詰めると、鋭い蹴りを上部へと食らわせる。不意打ちの一撃、残った方も昏倒し、地面に倒れた。

一瞬の間に制圧された侵入者を前に、守衛たちは動けないでいたが、その中の一人が「確保っ!」と声を上げる。それを皮切りに全員が動き出し、二人は取り押さえられたのだつた。

守衛が動き出した頃にはレビイ0は退避済み。戻ってきた屋上で通信を開く。

『レビイ6、聞こえるか?』

『ああ、無事に寮にレビイ9は帰したよ。問題ないとと思うが、一応そつちに向かつてる所だ』

『もうこつちは片付いたよ。まあ、念のため周囲を俺たちで調べておこうか』

『分かった』

レビイ6の現在地を確認しようと、端末の画面をつける。他のカメラも回収しないといけないからな。一方的な戦闘があつたとはいえ、

カメラは警戒に当たらせたまま。それぞれが捉えている映像を最後に確認しておく。

『……ッ!? 不味い。レビイ6、緊急だ、その道を急げ!』

突然声を荒げたレビイ0。珍しいことに驚き、レビイ6は息を呑む。

画面に映る中の一つ。あの子に固定していたカメラが“異常”を捉えていた。杞憂ではすまなかつた。犯人はアストラル関連の何かを狙っていた。それは研究資料や技術ではなく——。

『お前の言つてたあの女の子に危険が迫つていてる』

## Chapter. 0—13

目的のデータは無事に入手。その後、レビイ9を寮へと送り届けた。本来ならこの任務はそれで完了だつたはず。そのはずだつた。

『お前が言つていたあの女の子に危険が迫つていてる』

レビイ0からの通信。猶予がないということは声色から伝わつた。送られて来た場所は寮からさほど遠くはない。レビイ6は目的地点へと急いでいた。

茂みの中を駆け、赤外線センサーを回避。監視カメラは姿勢を低くしながら走り抜ける。

「い、一体なんなのっ!? ちょっと、いたつ、は、離しなさいよ!」

指定された場所に近づくにつれ、少女の声が聞こえてくる。夜中、他の雜音が殆ど無い静かな時間帯。その為か、まだ距離があるはずなのに鮮明と耳へ声が届く。

「(不味いっ!)」

レビイ6は能力で脚力を強化。地面を蹴り出して速度を上げる。目的地までの最後の監視カメラを通過した。もう映像に姿が映り込む心配はない。能力の出力を上げ、更に加速していく。

レビイ0の通信を受けてから時間にしてほんの数分後。左右の茂みと木々が他より少し開けた場所、学院の校舎へと続く道の途中。現場へと到着していた。

レビイ6は、視界に少女と二人組を男を捉える。事前に記憶していた監視カメラの設置箇所からして、配置的にこの場所は丁度死角となつてているはず。

それを計算した上で、あの男たちは侵入し、少女を襲つた。計画的な動きからして手練れの連中という可能性はある。苦戦するかも知れない。

レビイ0が対処に向かつた方は單なる陽動だろう。警報が鳴るようになつて、守衛たちを一力所に集める。しかもこの場所からかなり距離のある所にだ。お蔭でレビイ0の到着が遅れている。

二人で対処できるのが理想的だったが、待つてはいる余裕はない。

男の一人はナイフを持ち、もう一人の男は少女の腕を掴んでいる。少女は抵抗しているが男との力の差は大きい。その腕が離れる気配は全くといって見られなかつた。

男たちの行動からして、あの少女を連れ去るのが目的のよう。このまま、見す見す逃す訳にはいかない。

レヴィ6は接近していく勢いをそのまま利用して、少女の腕を掴んでいる男に体当たりを食らわせる。腹部に強烈な衝撃が走つた男は吹つ飛ばされ、地面に転がる。同時に少女の腕から手が離れると、抵抗していた弾みで少女は尻餅をついていた。

「だ、誰だっ!」

見えない相手からの強襲。残された男は周囲を警戒する。だが、迷彩機能で景色にとけ込み、況してやこの暗闇の中だ。いくら辺りを見回してもレヴィ6の姿を肉眼で捉えることは出来ない。

守衛が向こうで気を取られていることを知つてゐるせいか、この場に駆けつけて来ないのを良いことで余裕を持っていた分、突然のことでは焦りが表情に滲んでいる。

隙だらけの相手。完全な死角から再び接近していくレヴィ6。能力により、強化された脚力で繰り出した蹴りを直撃させる。男は防御も受け身も取れずに倒れると、そのまま気絶した。握られていたナイフは音を立てて落ちた後、地面を流れるように滑っていく。

「……ちつ、油断してたぜ……。姿を消す能力、アストラル使いか。そんな奴まで警備にいるとはなあ。まあ、ここ施設らしいといえば、らしいのか」

体当たりを食らわせた男が起き上がつていた。入りが甘かつたのか、気を失わせるまでは持つていけなかつたようだ。

しかも運の悪いことに、男の足元には先に気絶させた男のナイフが転がつてゐる。それを拾つた男は口元に不敵な笑みを浮かべると目を閉じていた。

「姿が俺に見えていないからつて、反撃はそうそうされない。お前ほどの実力となれば、そんなことを考えている訳ないよな?」

男は怪しげな笑みを浮かべる。すると、男の周りに妙な風が吹き始めた。それは集まるように、男を中心として旋風のように。

「こんな場所に侵入する連中が普通な訳ないだろ？ そんな奴らは、ただの捨て駒にされた馬鹿な奴らか、報酬の大金に目が眩んだ奴らくらいだぜ？」

男が目を開く。その瞬間、風の強さが一段と増した。地面を軽く抉り、巻き上げた葉や枝を切り裂きだす。超常の力、まるで操られているような不可思議な風。

「（こいつ、アストラル使いか！？）

気が付いた時にはもう遅かった。急いで回避行動に移るが、それよりも男の動作が速い。男が手をかざすと、渦巻いていた風が周囲へ一斉に散り散りと吹き荒れた。

男の能力で発生した風の一つがレビイ6の足に直撃する。密度が上がっているのか、刃のような切れ味を持つた風は特班の制服を裂き、皮膚から血が流れる。

「ぐつ、ああ……」

痛みにレビイ6は膝をつく。幸いなことに特班の制服は機能を維持していた。迷彩は解けていない。だが、血が地面に滴り落ちている。位置が知られてしまつた。

迂闊だった。軽率だった。自分のミスを悔やむところだが、それは許されなかつた。それはミスにより危険に晒されるのが、自分一人の場合だけだからだ。

「きやああつ!?」

少女の悲鳴。レビイ6が切られたのと同じタイミング。あの風の一つが少女にも当たつてしまつていた。

悲鳴を聞いたレビイ6は、痛みを堪えながら目を向ける。風の刃は胸元のシャツをざつくりと裂いていた。破けたシャツの間から、豊かな膨らみの富が露わになつてている。肌が見えるということは、深く切られているのか。

少女の怪我の具合を確認しなくてはならない。だが、傷を負つた片足に上手く力が入らない。立ち上がりようにも力が抜けて片膝をつい

てしまう。

ぽたりぽたりと地面を点々と小さく染める赤色。それを見た男は反撃が返つてこないことで、相手の状態を把握したのか、少女の方へと近づいて行く。

このままだと少女が連れ去られてしまう。男たちを制圧することに気を取っていた所為で、いつの間にか少女との距離が離れてしまっていた。

全開で能力を引き出せば間に合うか……分からぬ。でもやるしかない。今この場であの子を助けられるのは自分だけなのだから。

「動け、動け、動け、動けよ！俺の足つ！」

能力の用途を変更し、足の痛覚を一時的に遮断する。無理矢理に力を入れて動かす。立ち上がり、少女の方へと跳躍。でも、この距離は届きそうにない。次は体を起こせるかなって分からぬ。伸ばした手だけが、届かない手だけが、視界に沈んでいく。

救いの手ではなく、魔の手が少女に伸びる。怯える少女の姿が目に映つた。間に合わない。諦めたくない。力はあるはずなのに、この手が届かない。

「——ツ……」

能力を使い過ぎてしまつた、頭痛が襲う。遮断していた痛覚が戻り、痛みが襲う。どうすればいい？ 打つ手がない。少女を助けなければ——。

『そこ、射線の邪魔だから届め。レヴィイ6』

痛みでまた膝をついた時、通信が入つた。反射でレヴィイ6は体勢を低くすると、体の上を一筋の影が微風を起こしながら通過していく。「ぐああつ！？」

次の瞬間。男の声と共に、その手から刃物が落ちる。それはとても見覚えのある攻撃だつた。レヴィイ6が自身の能力を応用し、特注のゴム弾を飛ばす攻撃。

戦っている間にレヴィイ6が、自身の能力範囲まで来たのだろう。同じく迷彩機能を使用しているからか、その姿は見えないのだけれど。武器を失い、更には痛みで腕を押さえる男。そこに軌道を変え、

戻ってきたゴム弾が直撃した。男は昏倒し、その場へ力無く倒れたのだつた。

†

「——大丈夫か、レビイ6」

後ろから声を掛けられた。迷彩を解除していないはずなのに、ほぼ正確で。ということは、現在地を知っている人物、レビイ0。

「悪いミスつた。俺はもう大丈夫。それよりも——」

少しふらつきを見せながらも立ち上がるレビイ6。その足が向かう先には、狙われたあの少女がいた。少女は腰が抜けているのか、地面にへたり込んでいるまま。

「三司さんっ！」

あの少女の名前は『三司さん』と言うらしい。変に焦るレビイ6を不思議に思ったが、少女をよく見ると、胸元のシャツがざつくりと裂けていた。

三司さんの傍まで駆け寄つていったレビイ6を追い、隣に腰を下ろすレビイ0。

「何があつたんだ？」

「さつきレビイ0が倒した男がアストラル使いだつたんだ。俺の対応が遅れて、三司さんが巻き込まれた。傷が深いはずなんだ、急いで止血しないと」

「……ああ、分かつた。簡易的とはいえ大体の道具一式は持つていて、使え」

腰にある小型の医療パックから何点か用具を取り出す。包帯や薬やら止血剤まで色々と。簡易とはいえ、用意周到なのはいつもの癖の念のためだつた。

ただ、疑問が一つ。些細なことかも知れないが、レビイ6の言葉に違和感があつた。それはこの子、三司さんのことなのだが――。

「そ、その声……もしかして、あ、在原……君？」

浮かんだ疑問を尋ねる前に、三司さんがゆっくりと口を開く。名前

を呼ばれて少し驚いたが、レビイ6も同じ名字だ。彼女が呼んだのは俺ではない。

この二人は面識があつてもおかしくはないはず。既に編入しているからな。だが、これでは迷彩機能を使ってまで正体を隠している意味がなくなつた。

これから手当てをする。余分なやり取りは時間の無駄だ。守衛がいつ駆けつけるか分からなし、俺たちに時間は余り残されてはいな。

「……いいか？ レビイ0」

「はあ、室長には一緒に説明してやるよ」

「助かる」

もう隠してはおけないと判断したレビイ6は迷彩機能を解除した。完全に正体を知られてしまうことになるが、緊急事態だ、仕方無い。親父には怒られそうだけど。

目の前に姿を現したレビイ6、在原暁。その突然の光景に目を丸くする三司さん。まあ、無理もないか。正体を明かした暁と直接声を交わしていたレビイ0、在原伊吹も迷彩機能を解く。いざれ知られてしまうことだし、と。

「ほ、本当に在原君だつたんだ……どうして在原君がここに……。それに、その人は誰なの？ 何がどうなつてているの？ さつきの人たちは一体何なの？ ねえ在原く——」

「その話は後だ、今は胸の傷の手当てを、早く止血しないと！」

そう言うと、暁は破れたシャツに手を伸ばす。三司さんは自分に近く手の先、胸元へと徐々に視線を下げていく。そして。

「えつ、胸？ ……っ!? ちょ、ちょっと待つて、在原君っ！ だ、大丈夫だからっ！ 怪我なんてしてないから！ ホントに大丈夫だから、触らないで、ね？ お願ひだからあ！」

暁の手を避けるように自分の手で破れたシャツを握り、裂けた部分を隠す三司さん。見られたくないものもあるのか、暁から距離を取ろうと後ろに下がろうとしていた。だが、その手を暁は掴み、それを止める。

「大丈夫なわけないだろ、傷口を早く見せるんだ！」

「あつ！ ちよつ——」

手当ての為に仕方なく。暁はシャツを押さえている手を無理矢理に退けた。三司さんの手からシャツが離れると、簡単に捲れ、素肌と下着が露わになる。下着にも届いていたらしく、それは傷の深さを現していた。そのはずなのに——。

「血が、出ていない？ それに傷口も……ない」

「ああ、やつぱりか」

それが伊吹の抱いた些細な疑問の答えたつた。暁が焦っている割には三司さんからは出血している匂いがしなかつた。この場で血を流したのは暁だけ。

——ポロツ、ポロツ……。

捲れたシャツの中から血の代わりに、そんな音で表現できるような感じで“何か”が地面に落ちてきた。傷口の再確認で暁は気が付くのに遅れる。

「ん？ なんだ？」

伊吹が前に落ちてきた“それ”を拾い上げていた。“それ”は何やら柔らかい物だ。感触を確かめること数秒間。“それ”がなんのか理解したようだつた。布製で作られている角の丸い三角形の物。「……うん。あのさ、俺は初めて見たんだけど、これって——」

伊吹は暁にも“それ”を手渡した。同じく感触を確かめ始める。そして、二人はそれぞれ頷くと、結論へ至つた。

「……ああ。俺も存在自体は知つていたけど、初めて見たな」

実物は見たことがなかつた。だが、知つてはいた。でもまさか、こんな状況でお目に掛かることになるとは思いもしなかつた。そう、これは——。

「パッドだ／だな」

「あ、あ、あ、ああああ……」

嗚咽を漏らすように、声にならない声が三司さんの口から溢れる。だが、そんな状態の三司さんに追い打ちをかけるかのように、暁があることに気が付いていた。

「パッドだけじゃ……ない?」

裂けてしまった下着の更に下。今度は布製ではなく、シリコン製の下着が存在していた。それも胸の大きさを盛る為のものだということは見た目ですぐに理解できた。下着にしては形が変だつたから。「……つまりあれか。この子は『巨乳』じゃなくて『虚乳』だつたってことか?」

伊吹が顎に手を添え、そんなことを呟く。

「お、上手いな」

「全然上手くなんかねえよ! 大丈夫だつて言つたのに、触らないでつて言つたのに、怪我なんてしてないつて言つたのに……。それを、それを無理矢理ひん剥いて!」

目元を潤ませながら怒る三司さん。乙女の秘密、同性であつたとしても知つてはいけない秘密。それをよりにもよつて男である二人が知つてしまつた。泣き怒るのも無理はない。

「余計なこと言うから三司さん怒つてしまつたぞ」

「すまん、つい言いたくなつてしまつてな……」

と、やり取りをしている場合ではない。顔を赤くし、今にも泣きそうな三司さんをどうにかして落ち着かせないといけない。騒がれたら面倒なことになつてしまふ。

「わ、悪かつた、三司さん。三司さんが俺のミスで怪我をしてしまつたと思つて、焦つていたんだ、本当に悪かつた!」

宥めるように謝罪の言葉を並べる暁。でも、まだ三司さんは落ち着かない。

「だつてほら、パッドがあるなんて知らなかつたし、それで怪我をしなかつたなんて、普通は考えられなかつたから……」

「——ビキツ……」

「……隙を与える二段構え、くくつ……」

「——ブチンツ……」

伊吹の思いつきで呟いた言葉が決定打となつた。

「パッドのおかげで無事だつた? 偽乳だから助かつた? 何が二段構えだ?」

あ、これは終わりましたね、お疲れ様でした。

「辱めて、馬鹿にして、さらに馬鹿にして……ぐぬうううううううううう。誰が乳部・タイラードつ！　お前らまとめてぶつ殺してやるうううううう！」

「そんなことは言つてねえよ！」

伊吹と暁の声が綺麗に重なつた。そして、この大声は非常に不味い。

「おい、こつちから声が聞こえたぞ！」

「侵入者か!?」

たくさん足音が聞こえてくる。守衛たちにさつきの大声を聞かれたか。もう時間切れだ、撤収しないと不味い状況になつてしまふ。「そもそも、なんでこんな時間に、こんな所で、一体何をしているの？さつきの連中も訳が分からんし……大体在原君、あなたは何者なのよ！　謎だらけなんだけどつ！」

「それは——」

「お、俺は……」

伊吹が誤魔化しに入ろうとしたが、先に暁が何かを言い掛ける。彼女と面識のある暁に言わせた方が良いだろうと、この時に任せたのが不味かつた。が、後悔は遅い。

「俺は……君を守る為に來たんだ！」

隣の暁君は、それはそれはとんでもないことを口にしてくれましたとさ。

# 潜入、編入、橘花学院。Chapter. 1

『全く……。とんでもないことを言つてくれたな、暁』

室長、隆之介の溜息混じりの声。仕方がないと言えばそうなのだけど……。

橘花学院から撤収した後、伊吹は人気のない路地に入るとタブレットの電源を入れていた。そして、自分の寮部屋に戻った暁と通信回線を繋ぐと、今回の任務報告をする為、親父にも通信を繋ぐ。複数通話というやつだ。

『本当に自分でも何あんなことを言つてしまつたのかと……』

「ホントつすよね、暁つち、マジやばくないっすか?』

『まずお前は落ち着け伊吹、キヤラが崩壊してるぞ。……にしても伊吹、お前がついていながらこんな予想外過ぎる事態になるなんてな』

「判断ミスっすね。マジ、てへペろですな』

『ツツコミはしないからな? それにもう古いぞ、その台詞。はあ……まあ、過ぎたことを言つっていても先に進まない。任務の報告をお前たちから頼む。こちらでも大まかには把握しているが、詳細を知りたい』

伊吹と暁は画面越しに顔を見合わせると、伊吹の方は目を閉じる。無言の圧力。お前がしなさいと言わんばかりの。その反応を見た暁は「まあ、 そうなるよな」と小さく一息ついた後、報告始めた。

『……任務の目的だつた偽札の容疑者についての情報入手は成功。データは既に特班にも送信済みです。ですが、入手後、撤収直前に敷地内で警報が作動しました』

『レビイ0が侵入者をカメラで捕捉、対処へ行動を変更し、その間にデータを入手した俺とレビイ9は寮まで確保していた退路を移動。その後、レビイ0から緊急の通信を受け、俺が別の侵入者と交戦することになりました』

『——そしてその時にお前は彼女に顔を見られただけじゃなく、迷彩機能まで見られた。で、援護に入ることとなつた伊吹の存在も感づかれて、二人とも仲良く正体を見られたと……』

『……はい……』

『……はあ』

室長は長い溜息をつくと、呆れたような目で二人の顔を交互に眺める。暫くして、大きく息を吸い、もう一度溜息を吐いた。

『まあ、暁の部屋に守衛や先生が来ていない所を見ると、あの子は一応秘密として守つてくれているということなんだろうな。もし、駆けつけた人たちに本当のことを話していたとしたら、今頃、暁は拘束されてもおかしくはない』

「あの侵入者と交戦した地点は監視カメラの死角だつたし、俺たちの姿も映つてはいないはずだ。念のため、七海に頼んで付近の監視カメラの映像は確認しておくつもりだけど」

とは言うものの、暁の話だと……七海に会う時にどんな反応されるかが怖いんだよな。

『偽札の件もまだ片付いていない。その前に学院側へ正体が露見しまつては全てが無駄になる。今回は彼女に感謝しておくんだな。とりあえず現状では二人共、減給は確定だから覚悟しておけよ?』

「ただでさえ……ただでさえ、最近は経費で落ちない出費が多いってのに……」

『ミスはミスだ。お前が任務のミスを嫌うのはよく知っているが、減給で済んだだけでも良い方だつたと思え。取りあえず、現状での処分はそれだけだ』

『分かりました』

「……分かったよ」

『となれば、だ。あの女の子、えつーと、三司あやせさんだつたか。彼女の信用さえ得ることが出来れば、暁、お前のミスによる問題は最小限に留められる』

『その上で、暁、いやレビイ6。お前に任務の追加だ。彼女、三司あやせを護れ。そしてレビイ0はそのサポート任務を追加する』

『それは潜入任務の件も継続しながら……ですか？』

『当たり前だ。学院に潜入させる前にも言つただろ？ 潜入するには学生の身分であるお前たちが適任だつて。そもそも今更すぐに他の人員を手配している余裕もないしな』

『では、彼女に姿を見られたが、学院から撤収することはないと？』

『ああ、現状での判断だがな』

『それにもし、今回の侵入者のような連中によつて、彼女に何かあつたとする。するとだ、社会的には三司あやせは“アストラル使い”だから狙われたんだと人々は考えてしまう。そうなると、アストラル使いへの隔たりが更に深刻化してしまう可能性がある……かも知れない』

「かも知れないんだつて、暁ちゃんや」

『そして、それがアストラル技術の発展に後れを生じさせ、その結果として、諸外国と差を大きくつけられることとなり、国益を大きく損なうことになる……かも知れない』

「かも知れないんだよ、暁君や」

『いや、流石にそれは無理があるんじゃ……。それに伊吹兄さんもうしたの』

『無理があるないの話じゃない。建前を作らないといけないんだよ、立場上な』

『兎に角だ。彼女の信用を勝ち取ることが出来れば、問題はまずなくなる。自分の台詞で巻いた種なんだから、自分でしつかりと刈り取れ、いいな？』

『……はい……了解しました』

『宜しい。では、これで通信終了だ。二人共、しくじるなよ？』

†

暁の問題発言から夜が明けて。折角、自分のお金を使って取つたホテルの部屋では一睡もせず、ホテルを後にすることに。

ああこれも経費じや落ちないんだよな……暁に請求するか。うん、そうしよう。倍くらいにして。

昨晩の任務で使用した特班の制服を脱ぎ、昨日この街まで着て来た私服ではなく、現在着ているのは橘花学院の制服。クリーム色をメインとしたブレザー仕様だ。

今日は編入初日ということもあり、あまり着崩したりはしないでいる。まあ、最初の数日くらいだけど。

制服は橘花学院へ編入の申請をした時、暁たちと一緒に注文していった物。サイズは適当に特班の制服を作り直した時の値を伝えた。多分、あまり変わりはないだろう。

たった数年前のことだし、仕事柄、体型の変化には一応気を付けているつもりだ。鍛錬も怠つたりはしていないし。暁も同じようにしていたが、七海は自分で測り直していただけか。まあ、女の子だからな。

バツクを肩に掛けて街を歩いていく。暁ヘシートを渡したコンビニを過ぎて、數十分もした頃には、昨日降りた駅、橘花学院前。そして校門へと到着。

全寮制な学校の為、前に通っていた学校とは違つて、登校して来る生徒の姿は見えない。多分、それも理由の一つなのだと思うが――。見ない顔で学院の制服を着ているからか、校門に立っている男の守衛二人の目が自然と伊吹に向けられていた。

「……まあ、仕方ないのかな」

昨日の今日だ。懷疑的な視線を感じる。昨晩、敷地内への侵入を再度許し、しかも今回はただのファンでは済まなかつた。

アス troal 使いによる複数犯の犯行。

未遂で終わりはしたが、この学院の生徒が危険に遭つたということに変わりは無い。普段より一層と見知らぬ人物へ警戒心を向けてしまうのは仕方がないこと。仕事としても“上”から圧が掛かつてゐるかも知れないし。

分かりますよ、似たような上下関係がある点としてはね。

「あの、すみません――」

元々、守衛には声を掛けるつもりだつたから別に問題はない。夜中と違つて、もう俺はこここの生徒。堂々と、正面から。遠慮なく。

「本日から編入することになりました在原です。これが手続きの書類と学生証なんですが、中に入れますでしょうか？　そこまで詳しく連絡は受けて来なかつたので……」

学院から届いた大きめの茶封筒をバックから取り出し、その二つを中から抜き出した。書類は守衛に手渡し、学生証は貼られている写真と伊吹の顔を見比べて。

「ちょっと待つていて下さい。確認して来ますので」

男は守衛所に入つていき、備え付けられた電話の受話器を手に取ると、何処かに内線を掛けた。時間にして一分未満。短めな問答をした後、こちらへ戻つて来る。

「お待たせしました。確認が取れましたので、問題ありません。迎えの先生がここまで来るそうなので、もう少しお待ち下さい」

「あ、はい。分かりました」

守衛は書類を伊吹に戻すと、仕事へ戻つていった。伊吹は門に背を預けて待つことに。

……。

……。

数分後。コツコツと足音が聞こえてくる。呆けるように雲を眺めていた目線を音がする方向、校舎のある方へ向ける。すると、一人の女性が歩いて来たのが見えた。

「……んん？」

あの人……どこかで見たことがあるな。ああ、任務の時カメラに映つた人だ。三司さんと歩いていた人。学院の関係者とは思つていたが、ここのお先生だつたのか。

伊吹は預けていた背を壁から離し、女性の方に体を向ける。お互いの距離が近くなると、先生から声を掛けてきた。

「あなたが在原伊吹君ですね。初めまして、あなたの担任となります柿本です」

「よろしくお願ひします、柿本先生」

落ち着いた声の女性。見た感じ、第一印象をしては若い先生という

感じだつた。伊吹は返事をしながら軽く会釈をすると、柿本先生は一度瞼を閉じて返す。

「まずは理事長室に向かうことになつていますので、私に付いて来て下さい」

柿本先生は体を反転させ、来た道を戻つていく。言われた通りに伊吹はその後ろを付いて歩いて行つた。

広い中庭に各施設。七海から貰つていた見取り図のデータや、任務で見た夜の景色しか知らない伊吹にとつて、明るい時間帯での景色は新鮮だつた。

暫くして。昇降口に着くと、靴を履き替える。校舎内を進んで行き、階段を上がり、廊下を歩いていくと、柿本先生は一つの部屋の前で足を止めた。

廊下に並ぶ他の部屋とは違う雰囲気を漂わせる扉の前。ここが理事長室らしい。校舎の内部配置までは把握していなかつた分、注意深く見てしまるのは職業病なのか。

そんな周囲を見回している伊吹とは別に、柿本先生は扉を数回軽く叩く。

「柿本です。本日から編入する学生を連れて来ました」

「ああ、入つてくれ」

中にいる人物から返事があると、柿本先生は扉を開ける。高級な革製のソファが対に置かれ、背もたれが高い椅子に艶のあるデスク。先生に続いて扉を潜ると、いかにも偉い人が仕事をしていそうな内装をした部屋が広がつていた。

そんな部屋の中、入つて来た二人の姿を見た一人の男が椅子から立ち上がると、こちらへ近づいて来る。厳格そうな目つきの鋭い男、この人が学院の理事長か。

「初めまして、在原伊吹君。私が理事長を務めている伊勢篤紀だ。君の事情については弟さんと妹さん同様に聞いている。色々と大変だつたな」

「いえ、そんなに大変だつた訳では……。俺はあんまり気にしなかつたですし。ですが、妹のことを大切に考える兄としては、ここの大変

院に編入した方が安全なのかな、と

理事長の言う事情——。俺たち兄妹が学院に編入することになった理由は、暮らしていた所でアストラル使いだということが露見してしまった、ということになつていて。まあ、嘘なのだけれど。提出した経験なども所々偽つている。

最先端の研究施設も併設されているだけあって、身元の調査はかなり厳重な所なのだが、すんなりと編入することが出来た。特班の力は凄いものだ。俺の場合は、特班での経験も偽りだらけなのだが……それは今は関係ないか。

「君は兄妹思いなんだな。この学院は君たちのような若者を受け入れ、自分の力を理解し、有益に生かしていくこと。前向きに生きる方法を見つけてもらう為に設立したのだからな」

確かにアストラル使いにとつてここ環境はとても有難いものだ。前向きにという点では少々疑問もあるが、既にアストラル能力を有益にといえば生かせていると思う。

「さて、君には早速で悪いが、編入の際に必要となる手続きがもう一つある」

「それはAEMSへの登録……ですよね？ 封筒に入っていた資料にそう書いてありましたし。そればかりはこつちに来てからでないと出来ないことですから」

「ああ、そうだ。この驚逗研究都市で暮らすアストラル使いは全員登録してもらうことになつていて。本来ならこの後にでもAEMSへ登録をしてもらいたい所だが——」

そこまで言い掛けると、理事長は腕時計で時間を確認していた。その様子から伊吹も壁に掛けられていた時計に目を向ける。

「もうすぐ始業時間だな。それは昼にしよう。担当の者が君の教室まで迎えに行くようにしておく。登録についてはその者の指示に従つてくれ」

「分かりました」

「では、在原君。よい学院生活を送つてくれ」

「はい、これからよろしくお願ひします」

最後には僅かながらに口元を緩めていたのが見えた。外見では怖  
そうな人だが、内面はそこまでではないのだろう。

あれだな、こういう人ほど綺麗な奥さんとかいるタイプの人だな。

「柿本先生、彼を教室まで頼みましたよ」

「はい。では理事長、失礼します」

「失礼しました」

## Chapter. 1—2

「在原伊吹です。これから宜しくお願ひします」

教卓の横に立つて自己紹介。見知らぬ人ばかりの新しい教室。友人作りも最初から……か。上手く馴染めるか、受け入れてもらえるか心配になつてくる。そう思つていたんだ、教室に入るまで、俺はそう思つていたんだ。

「——ツ!?

教室のほぼ真ん中の席でただ一人。驚愕といった表情を見せている女生徒が。まさか同じクラスになるとは、偽……いや、パツ……三司あやせさんよ。

「在原君の席は……」「二条院さんの隣になりますね」

「……分かりました」

三司さんの反応に苦笑いを浮かべていた伊吹に、柿本先生がそう言つてきた。先生から指示された机。窓側、教室の後ろ側の席。一つだけ空席になつてゐる場所があつた。そして、その席の隣に座つてゐる女の子。あの子が二条院さんか。

並ぶ机の列の間を進み、自分の席に到着。バックを机の脇に掛け、椅子に腰を下ろすと、隣の二条院さんに声を掛けてみた。編入してからの第一歩だ。

「えーっと、在原伊吹です。これから宜しくお願ひします、二条院さん」

「ああ、こちらこそ宜しく頼む。それにそんな畏まらないでくれ。私たちは学年も同じだし、同級生なんだ、遠慮はいらないんだぞ?」

二条院さんは腰までかかる綺麗な髪が印象的だつた。しつかり者の女の子という雰囲気、それでいて気遣いも。クラスの中心的、委員長とかしていそうなタイプ。そして美少女。

「分かつた。えつと……」

「羽月だ、二条院羽月」

「じゃあ改めて。宜しく、羽月さん」

「こちらこそよろしく頼む」

クスッと微笑を浮かべる二条院さん。にしても、なんだか喋り方が渋いように感じるな。女子高生としては珍しいと思う。家柄的なものなのだろうか？

「在原君と呼ぶと弟君と被つてしまうからな、君のことは下の名前で呼ばせて貰うぞ？」

「そうしてもらえると助かるよ。妹も同じだからさ」

「ワタシは男の人をあまり名前で呼んだ経験がなくて、少し恥ずかしいものだな、これは。伊吹、伊吹君か……。うん、これも良い機会だ、早く慣れるよう努力してみよう」

照れた様子で一度瞳を閉じ、一人頷いていた二条院さん。再び目を開くと、何やら伊吹の方から変わった視線を感じていた。

「……、——うーん……」

二条院さんの顔をジーツと見つめている伊吹。それに気が付いた時、二条院さんは僅かながらにも頬を染める。

「ど、どうかしたか？……その、だな……あまり見つめ続けられると

流石に照れてしまうぞ。ワタシの顔に何かついているか？」

「うーん……。いや、何故かは分からんだけどさ、巫女装束とか、風紀委員長とか、オタサーの姫だつたりしたりしないのかなあーって思つて……」

「へっ!? い、いきなり、な、何を言つているんだ?」

「ほら、舞を踊つたり、カニコロ作つたり、ちや〇ーとか言つてみたり

——

「そ、そういう危ない発言はダメだぞつ!?

「できれば、忍者の子も登場して欲しかつ——」

「だから、それ以上は、それ以上の前にダメだー!」

これ以上の問題発言を止めるべくして、二条院さんは伊吹の口を急いで両手で塞ぐ。そう、見えない不思議な力が働いてしまう前に……。

だが、二条院さんの声は思つたよりも大きかつた。それは黒板に向かっていた先生にも勿論聞こえてしまつていたらしく——。

「そこの二人、静かにお願いしますね。授業を始めますので」

柿本先生の声で我に返つた二条院さんは、慌てて伊吹から手を離し、自分の席に座り直す。顔は火照ったように赤くしたまま。きっと、羞恥からだろうな。眞面目な彼女の性格からして、普段から注意を受けたりすることがなさそうだし。

えー父上へ。早速、仲の良いクラスメイトが出来そうですよ、と。以上、伊吹より。

†

「伊吹兄さん、ちょっとといいか?」

授業は何事もなく淡々と進み、お昼休み。教科書を机に仕舞つていると、暁が席まで近づいて来た。声を掛けられて見上げた先には勿論のこと声の主である暁。そして暁の横に立っていたのは見知った子、三司さんだ。

「どうした暁。もうお兄ちゃんに将来のお嫁さんでも紹介してくれるのか?」

「いや違うつて……あれだ、仕事の件だよ」

「ああ……いや、分かつてはいたけどさ、現実逃避したい案件じゃん? というか、元はと言えばお前のミスから始まつたことだし——」

暁の一言で事の察しは容易につく。その証拠に三司さんが暁の隣で笑顔を浮かべていた。でも、完全に貼り付けたような作りものの笑顔。だつて、目が笑っていないもの……。

きつと三司さんは偽乳だけじや飽き足らず、性格も盛つているに違いない。

思えば任務の時、猫の皮が脱げた彼女の発言は酷かつたな。面倒だろうに、何が彼女にそこまでさせているのか。気にはなるが、理由を聞くのも怖い。

「伊吹君も一緒に学生会長室へ来て頂けますか? お互にお話したいことがあるでしようし。あ、昼食をとつてからでも大丈夫ですよ」「あ、ああ。確かに話したいことはあるんだが……悪い、昼は用事があるんだ。AEMSの登録がまだでき、理事長の話だと担当の人のがこの

教室に来るらしいんだ。だから待っていないといけない」

言葉こそ優しい声色なのだが……言い表せないこの見えない圧力はなんだろうか。思わず声が詰まってしまった。

「まだ登録してなかつたのか？」

「お前と違つて平日の朝からの編入だからな。時間がなかつたんだよ」

「分かりました。なら仕方ありませんね。では、伊吹君とは後日、お話ししましよう」

終始作り笑みを崩さずについた三司さんの背中に暁はついて行つた。そんな二人の教室を後にする姿を眺めながら、伊吹はこつそりと手を合わせる。

「骨は拾つてやるからな、暁。それがお前の兄としての役目だと俺は思つている」

……。

……。

……。

暁が連行されていつた後、ほんの数分が経つた頃のこと。  
「大事なお昼休み時間にごめんねー。在原伊吹君つて子、この教室にいるかな？」

廊下から女の人の声がした。呼ばれたのは自分の名前だ。教室に残つていた数人の視線が声の方に向かい、伊吹もその中に混じる。  
「ああ、あの人人が担当の人かな」

教室のドアの辺りに、白衣を着た女性が立つていた。一見、服装からして併設されている研究施設の関係者かなと思ったが、白衣の下には橘花学院の制服が見える。こここの生徒、上級生か？ 下級生とは思えないし。

「はい。俺です」

顔までは知らないらしく、きょろきょろとしている女性に声を掛け、椅子から立ち上がりると、女性の方へ早足で寄つて行く。

その姿に気が付き、伊吹の顔を見た女性は口元を緩めていた。

## Chapter. 1—3

「最上階の研究棟まで行くから、アタシについてきてね」

教室まで呼びにきた白衣の女性に案内されながら廊下を進み、階段を上つていく。

「（個人の研究室を持つているのか……）」

やつぱりこの人は上級生という以前にそもそも学生ではないのか？ でも見た目は若そうだし……最近の女性は見た目で年齢を判断するのが難しい場合が多いからなあ。うーん、あまり気にしなくてもいいか。

「AEMSへの登録はアタシの研究室からでもできるから、わざわざ遠くにある併設の研究施設まで行く必要はないんだよ。便利でいいでしょ？」

前を歩きながら顔を少しだけこちらに見せると、女性は微笑む。

確かに校舎内で済ませられるのならそれはそれで有難い。休み時間も長くないし、そもそも併設されているとはいえ、研究所までは距離があるから正直行くのは面倒だつた。

女性について歩いていくこと数分後。一つの部屋の前に到着する。

「ここがアタシの研究室だよ」

研究室の扉に鍵穴といったものは見当たらなかつた。扉の横に備え付けられた手の平ほどの大きさの装置が開閉する為のものだろうか？

だが、カードキーを通す場所はついていない。小型カメラもない。

顔認証や網膜スキャンの類いでもなさそうだ。なら何を使って開けるのだろうか？

「ああそうか、アストラル認証……」

昨夜の作戦で暁が使用した例のシート。メモリー纖維を組み込んだシートを使い、侵入した部屋がこの先輩の研究室だつたのか。

侵入経路、方法、場所などは聞いていたが、誰の部屋なのかという情報までは知らなかつた。あまり重要なことではなかつたから。

よくよくと周囲の確認をしてみると、見たことのある部屋の配置。

実際に見るのは初めてだが、七海が送ってくれた見取り図を記憶していた為、階の間取りに覚えがある。

そんな伊吹を余所に女性は装置に手をかざすと、小さく機械音が鳴り、研究室の扉が開いた。その音で伊吹は視線を元に戻す。流石、最先端技術の研究をしている都市といったところ。これほど のセキュリティシステムが実用段階にまで進んでいるとはな。詳しく述べておく必要がありそうだ。

「さあ入つて入つて。あまり時間もかからないから、ちやちやつと済ませよう」

そう促され、先に入つていく女性の後に伊吹も研究室の中に入つて行つた。

†

「何か飲む？　まあ、それはいつても珈琲かお茶くらいしかないんだけどね」

「あ、珈琲でお願いします」

パソコンが置かれている机の近くに並んでいる椅子に座るよう促され、伊吹は腰を下ろす。女性は珈琲を淹れに。待つている間は特にすることもなく、お湯を沸かして珈琲を淹れてくれている女性の後ろ姿を眺めていた。

小さめの鼻歌が聞こえ、珈琲の独特な良い香りが鼻に届き始めた頃、二つのコップを持つて女性がこちらに戻つて来る。

「はーい、お待ちどうさま。伊吹君は珈琲飲めるんだね、良かつたよ」

コップの一つを手渡される。女性はもう一つを持ったままパソコンがある机、自分の席へ座ると、椅子を回転させてこちらを向く。

「昨日は暁君と七海ちゃんが来ただけど、七海ちゃんが珈琲飲めなくてね。これからは他に甘い飲み物も用意しておこうかなつて思つていたところだつたんだよ」

「あー、七海は苦いものが苦手ですから。大よそ変に意地張つて珈琲を頼んだはいいけど、結局は飲めなかつたつて感じですよね？」

「あはは、アタリ。まさにその通りだつたよ、流石は七海ちゃんのお兄ちゃんなんだね」

「いやあ、それほどでも……ありますかね？」

数度息を吹きかけ、一口飲む。うん、美味しい。これってインスタントじゃない、ちゃんとドリップしている本格的な珈琲だ、凄いな。「それじゃあ時間も限られているし、登録始めちゃおうか」

女性も一口飲むと、パソコンの電源を入れて起動させる。

カタカタとキーボードを叩き、画面上で色々と操作を行つてているようだが、ここからでは角度的に開かれている画面は見えなかつた。まあ、おそらくAEMSのシステムに繋いでいることは確かだろう。「えーっと……まずは名前に生年月日。それから身長と体重に、体力や視聴力。健康状態なんかも項目にあるんだけど、殆どは学院で行われる体力測定や健康診断のデータを追加で入れれば大丈夫だから、登録したいのはアストラル能力についてかな」

一通り操作を終えたのか、女性は手を止めてこちらに体を戻す。画面を覗こうとして身を少し乗り出していた伊吹だが、何事もなかつたように座り直していた。

「さてさて、伊吹君のアストラル能力は……『念動力』か」

編入する前に提出していた書類の数枚が机の上に置かれていた。アストラル能力を知つてているのはそこに記載されているからか。

「あー、でも力は弱いんですよ。小さい物、しかもあまり重い物は動かせませんし……」

女性はアストラル能力に興味津々なのか、自分の能力を簡単に説明する伊吹の言葉に頷きながら、書類の詳細に目を通している。

「ほうほう、うんうん……。——じゃあまずこれを持つてみてくれるかな？」

手渡されたのは細長い付箋のような色付きの紙。大きさとしては手の平から少しほみ出る程度の物。それにどこか変な感じがする、なんだろう？

「えつと、この紙は……？」

「アストラル能力の“性質”を調べるためのものだよ。まあ、説明す

るとついつい癖で話が長くなっちゃうから省略するけど、簡単に言えばリトマス試験紙のようなものなんだ」

暁と七海もこの検査を受けているとのこと。その時にさつき話していた癖が出たらしく、長々と説明してしまって二人とも呆気に取られていたらしい。

「とりあえず、その紙を持つたまま能力を発動させてみてくれるかな？」

「分かりました……」

女性に言われた通り、伊吹は紙へ意識を集中する。いつも能力を対象へ使う時の感覚で。すると、紙につけられていた元々の色が徐々に変化していった。一定量変化したところで女性に声を掛けられ集中を解く。

「えつーと……」

「これはね、アストラル能力を特定する為の検査の一つなんだ。こんな感じの検査を複数重ねて受けてもらうことで君の能力を特定していくからね」

「AEMSへの正式登録前に、登録者自身の能力が本当に申告通りなのかを調べるということ……ですか？」

「疑っているとかではないから安心して。確かに伊吹君の言う通り、能力が本当にそうなのか検査するのも含まれるけど、この検査の意味としては自分の能力を勘違いしていないかを調べる為のものなんだよ」

「それなら聞いたことがあります、飛行能力でもどうやつて浮いていいのかで、能力はまた変わってくる……とかですよね？」

重力を変化させて浮くのなら、それは俺と同じ『念動力』。風を利用して浮くのなら、それは『風の操作』といった感じになる。

「よく知っているね、なら話は早いよ。じゃあ早速検査していこうか」「はい、よろしくお願ひします」

…。

…。  
…。

「——うん、これで最後の検査は終了だよ。結果として伊吹君は“周囲に影響を与えることで力を発現するタイプ”だね。書類に記載されている通り、能力は『念動力』でまず間違はないと思う。これで今のところ必要なことはおしまい、お疲れ様」

「ありがとうございました」

全ての検査が終了するまで三十分ほどかかっただろうか。登録するだけだし、簡単な応答と手続きのような書類の記入がある程度だと思っていた。

「あとは珈琲でも飲んでゆっくりして頂戴。お昼休みの時間はまだあるからね」

そこまで言うと女性はパソコンで登録作業を再開する。

残った珈琲を口に運びながら伊吹は思う。そういえば女性の名前を聞いていなかつたことに……。

「（うーん……白衣も着てるし、年上みたいだし、研究室も持っているからなあ）」

「あの、せんせ——」

「ぐあつ！」

伊吹が“それ”を途中まで言い掛けた瞬間。女性は変な声を上げて、手に持っていたコップを落としかける。その反応を変に思つた伊吹は少し考えると「ああ……」と察した。

「……えーっと、先……輩？」

「な、なにかな？　い、伊吹君？」

ギギギツツと壊れかけのロボットみたいな拳動でゆっくりと女性はこちらに振り返る。そんな気にしていることなのか、と気が付いた自分を密かに褒める。

「そういうえば先輩の名前を聞いていなかつたなあつて思いました」

「あ、ああー……名前ね。あはは、そういうえばそうだつたね。自己紹介が遅れてごめんよ、アタシは式部茉優。学年としては伊吹君の一つ上だよ」

「式部先輩ですね、分かりました」

「伊吹君は先輩つて気付いてくれたんだね。暁君には先生なんて言わ

れちやつたんだよ……あはは……。まあ、こんな恰好もしているし、そう思われても仕方がないんだけどね……ぐすんっ」

「……すいません、あとで俺の方から暁にはしつかりと言い聞かせておきます」

自分が暁と同じことをしかけたことは秘密とするのを自身に誓い、式部先輩にはそう約束していた。暁よ、先輩になんてことを言つているんだ、全くもう。

「確かにアタシは生徒の皆より年上だし、七海ちゃんみたいにお肌もツヤツヤつて訳でもないから暁君が間違うのも無理はないよ」

「皆より……年上？」

「ああ、伊吹君には言つてなかつたね。留年してるとんだけよ、アタシ。しかも二回……。だから学園に在籍している生徒の皆よりだいぶ年上なんだあ」

「……留年、ですか」

「なんで留年してるのかなつて顔だね。別に成績が悪いわけではないんだよ、でも少し特別な理由があつてね……つて、この話はここまでやめておこうかな……」

式部先輩の表情が寂しそうに暗くなる。誼素はしない、誰しも話しあたくないことや聞かれたくないことの一つか二つあるものだから。事の軽重に関係なくな。

「ごめんね、なんか変な空気にしちやつて」

式部先輩は申し訳なさそうに苦笑する。

「大丈夫ですよ。でも式部先輩、一人で悩まないで下さいね、俺でも力になれることがあるなら何でも相談のりますから」

「ありがと、その気持ちだけでも嬉しいよ」

式部先輩は小さく笑みを浮かべると、雰囲気もさつきまでの調子に戻る。言葉こそ優しかつたが、関わらないでほしいといった拒絶の感情が混じっているように思えた。

——それから暫くして。

残った珈琲も飲み終え、特にこれ以上居座ることもないでの教室に戻ることを伝える。

「暇な時にでも遊びに来てくれる嬉しいかな。普段は授業に出ないでこの部屋にいるから暇なんだよね、別に研究が忙しいって訳でもないし」

「なら式部先輩が寂しくないように、ちよくちよく来ますね。先輩の淹れてくれる珈琲とても美味しいんで、また飲みたいですし」

「嬉しい」と言つてくれるね、伊吹君は。なら次はもつと美味しく淹れてみせるよ」

「それは期待しますね、では失礼します」

席から立ち、部屋のドアに向かう。

「午後の授業で居眠りしちゃダメだからね、アタシみたいに留年しちゃうから」

笑顔で手を振る式部先輩に笑みで返すと、研究室を後にした。

†

「うわっ、もうこんな時間か……」

一通りAEMSの登録を済ませた後、廊下を歩きながら携帯を取り出して電源を入れる。画面には待ち受けにしている写真と現在の時間が表示されていた。

もうあまり昼休みは残っていない。随分と式部先輩の研究室に長居していたらしいな。休み時間に寄つておきたい場所があつたが、真っ直ぐ教室に戻ることにしよう。

お昼も食べてないし、食べ終えた頃には丁度よく午後の授業が始まるとかな。

「(さてさて、暁君は生きて無事に戻つているといいんだけど)」

頭の片隅でそんなことを考えながら階段を下つていく。自分の教室がある階に到着し、廊下へ出ると、教室の前にお客さんが来ていることに気が付いた。

「ん？ あれは――……」

小動物のような小柄の女生徒が二人。一人がドアに身を隠しながら教室の中をコソコソと覗き、もう一人はその後ろ姿を楽しげに見

守っている様子。

教室を覗いている子はもの凄く見知った女の子、見間違えるはずがない。我が最愛の妹、在原七海だ。もう一人の女の子は……知らない子だが、学院の制服を着ているし、七海の友達かな？ もう友達ができたのか、お兄ちゃんは嬉しいぞ。

もう少し近くでの可愛い行動を見てみたり、コソコソと気付かれないように足音を消しながら二人へ近づいて行くと、七海を見守っている女生徒に小声で話かける。

「いきなりでごめんね、七海の兄なんだけど……」「わあ！——つと、び、びっくりしました……」

驚き、大きく声を出しそうになつていたが、瞬時に自分の口に手をあてて声を抑えていた。すみません、驚きましたよね。七海には気が付かれないようにしたかったんです。

この子の反応の早さに思わず拍手したくなつたが我慢。目の前の女生徒は七海と同じくらいの背丈に控えめの体つき。ブレザーオーバーに淡い水色のパークーを着ていた。

「えっと、七海ちゃんのもう一人のお兄さんですね。初めまして、ワタシは壬生千咲つていいます。七海ちゃんとはクラスが一緒なんです」「壬生さんね、よろしく。俺は在原伊吹、三兄妹の一番上だよ」

「じゃあもう一人のお兄さんのことはお兄さんって呼んじやつてますので、伊吹お兄さんつて呼ばせて貰いますね♪」

ニコッと笑みを浮かべる壬生さん。フレンドリーといえばいいのか、話した印象としてはそんな感じだ。こういう人を光属性というらしい、七海にそう教わった。

多分、編入したてで人見知りを発動し、無口状態だつたと思われる七海に最初に話かけたのはこの子だな。同じクラスに壬生さんがいてよかつた、安心できそうだ。

「さつそくなんだけどさ、七海は何してるの？」

「七海ちゃん、兄の顔を見に行きたって言つていたので一緒に来てよかったです。一人で上級生のクラスに行くのは怖いらしくて。暫く会つてないからとも言つてましたね」

「それって暁の方——じゃないか。暫く会つてないのは俺の方だし……」

「どれくらい会つていのいか、一年くらいかな……多分。「愛されてますねえ。七海ちゃんみたいな可愛い女の子に好かれるなんて羨ましいですよ」

「だろ? ホントに可愛い妹なんだよ。だからこれからも仲良くしてやつてね、人見知りだけど、寂しがりやでもあるからさ」

「勿論ですよ、寧ろこちらこそお願いしますつて感じです」

「よろしくね。じゃあ俺は七海のところに行つてくるよ」

壬生さんに静かにしておいてもらうようにお願いした後、ゆっくりと背後へ近づいていき、七海の真後ろから声を掛けてみる。

「おーい、七海さーん」

「じー……」

「(返事がない。ただの天使のようだ)」

真後ろに立つてゐるのに全く気が付く様子のない七海。

「……うーん、お兄ちゃんの教室つてここで合つてるよね。暁君から聞いたんだし、何回も教室の場所は確認したから間違つてないはず……でも、いないなあ……」

ブツブツと何やら小声で呟きながら、教室を覗き続けている七海。あの人見知りの妹が、上級生の教室まで来て自分を探している。あ、やばい泣きそう……。

「少し見ない間に成長したんだな、七海。お兄ちゃんは嬉しいぞ、うんうん」

「なんか保護者みたいですね、伊吹お兄さんつて」

壬生さんも近くまで来ると、伊吹の隣に寄り、目頭を押さえている顔を覗いてくる。

「ん、どうか? 保護者か、そう見えているのも嬉しいんだが……。いや、兄の方がいいな、七海には『お兄ちゃん♪』って呼ばれたいしさ」

「あ、はは……。そうですよねー、可愛い妹ですもんね」

壬生さんに引かれているように感じたが、まあいい。ホントのこと

だし。

うーん。このまま可愛い妹の姿を眺めていてもいいのだが、こんな近くにいるのに気が付いてもらえないのは寂しくなつてくる。どうしたものか……。

予鈴が鳴れば流石に気付くと思うけど、折角だし話もしたい。気付かせる方法は色々とあるが、普通ではつまらない。折角だし。

数秒、目の前で未だきよろきよろとしている七海の背中を見ながら思考すると、一つ思いついたことが。伊吹はニヤリと口元を曲げ、再び七海の真後ろに立つ。

今度は声をかけず、七海の頭の上へ顎をそつとのせると、ガクガクと連打するように動かした。それはもう高速で。

「ひ、ひやあつ!? ななな、なになにつ!」

驚きながら飛び退くように伊吹から距離を取ると、その勢いで尻餅をつく。自分の頭を両手で押さえつつ、若干涙目になりながらもこちらへと振り返つていた。

「お、おおおお兄ちゃん!」

「やつほー、久しぶり。元気にしちよつたか?」

「も、もう……後ろにいたならもつと普通に教えてよ! ずっと教室の中を探していったワタシが馬鹿みたいじyan……。上級生の教室だし、知らない人ばっかりだから凄く緊張してたんだから」

「ごめんごめん。それよりも何か用事があつたから俺を探しに来たんだろ?」

「べ、別に用事というほどのことでもないんだけど……。うう、なんていうかな……」

七海はもじもじとして頬を赤らめる。そんなに恥ずかしい用件で会いに来たのか? 兄の顔が見たいっていうのは壬生さんから聞いたが、それだけ訳はないだろうし……。

「もー、七海ちゃんつてば素直に言っちゃえば良いじyan。お兄さんに会いたかつたつて」

七海に抱きつきながら壬生さんが勝手に代答する。

「な、ななな、違うからねつ!? そ、そんな理由で会いに来た訳じやな

いからつ！ 絶対に違うんだから……勘違いしないでよね、もう」

「慌てる七海も凄く可愛いだろ？ 壬生さん」

「そうですねえ。えへへ、七海ちゃんってホント可愛いっ！」

ギュッと壬生さんが密着度を上げると、七海の赤面度も上がる。本当の用件については疑問が残つたままだが、七海が教室まで来てくれたのは助かった。

時間もなく諦めていたこと。昼休みに寄つておきたかつた場所は七海の教室だつた。せつかくいちやついているところ悪いが話掛けれる。

「あーっと、壬生さん。ちょっと七海に話があるから解放してやってくれないかな？」

「分かりました♪」

パツと壬生さんが離れると、七海は光属性にやられたせいか息を少し荒げていた。

「な、なに？ 変なことだつたら“変態”って呼ぶけど？」

「まあ、それはそれである意味で褒美なんだけど、そういうなくてさー」

」

……。

…。

「うん、いいよ。じゃあ放課後に連絡するね」

「ああ、分かつた」

兄の頼みに「しようがないなあ」と言いたげの微笑を見せる七海。ついついその可愛らしい頭を撫でたくなり手を伸ばしたが、これまた可愛らしい手に弾かれる。不満そうな視線を向けるとジト目で返された。

「えへへ、本当に兄妹仲がいいんですね♪」

「べつ、別にそんなことないよ。ただ伊吹兄さんは昔からことあるごとに頭撫でてくるから恥ずかしいだけだもん。しかも今は他の人の目だつてあるし……」

二人のやり取りを傍から眺めていた壬生さんがニヤニヤしながら

声を掛けてくると、七海はまた頬を染める。表情がころころと変わる  
ものだ。

「な？ 可愛いだろ？」

「はい、とつても可愛いです！」

「もう、二人とも流石に怒るよ？」

「えへへ、ごめんごめん」

七海を二人で愛でていると、教室に戻ってくる生徒が増え、廊下が  
少し騒がしくなつてくる。壬生さんが腕時計で時間を確認すると、予  
鈴の時間が近づいていた。

「あ、七海ちゃん七海ちゃん。そろそろ時間みたいだから戻ろう？」

午後の授業に遅れちゃうよ。次の授業、移動教室もあるし」

「うん、それもそうだね。じゃあ伊吹兄さん、また放課後にね」

「また今度お話ししましょう、お兄さん♪」

「あいよ、二人とも授業に遅れないようにな」

七海と壬生さんが教室に戻つていく姿に手を振りながら見送つた  
後、教室の中に入つた。何故か髪がボサボサになつている暁がいた  
が、無事に……うん、生還できたらしい。後で話を聞いておくか、何  
か面白そうだし。

自分の席に座ると、丁度よく午後の授業が始まることを知らせる  
チャイムが鳴る。結局、お昼を食べ損ねてしまつたが、まあいいか。  
七海も上手く馴染めているみたいだつたし、久しぶりに顔も見れたか  
らな。

## Chapter. 1—4

午後の授業も淡々と進んでいく。

合間の小休憩では編入生ということもあり、机の周りにクラスメイトが男女問わず集まると、質問攻めにあつた。定番と言えば定番なのかな?

そんなこんなありつつも時間は過ぎていき、本日最後のチャイムが鳴り、授業が終わる。そして迎えた放課後。一際、生徒たちの声が賑やかになっていた。

「さてさてつと……」

部活のある生徒や、寮に帰る生徒が一人、また一人と教室を後にしていく。今日話しかけてくれたクラスメイトも「また明日」と声を掛けてくれる。

そんな最中、帰り支度を一通り済ませた伊吹は、携帯の電源を入れていた。ポチポチと画面を操作すると、受信履歴を起こす。まだ七海からの連絡はない。

あっちも帰り支度をしている頃かな? もう少し待つてみようか。

「(なら、今のうちに話しておくかあ……)」

休憩時間にできなかつたこと。思い立つたらまず行動。携帯を仕舞い、暁の席に向かうことに。本人に目をやると、どうやら暁も帰り支度をしている様子。

「おーい、暁。ちょっといいか」

「ん? ああ、伊吹兄さん。どうかしたか?」

伊吹の声に反応して、暁は一旦手を止めた。声を掛けた後だつたが、伊吹は教室を一度見渡し、『ある確認』をしてから話し始める。「いやー、お昼のデートで何があつたのかつてさ。随分とイツケメーンになつて帰つて来てたみたいだつたからよ。また怒られるようなことでもしてきたのかい?」

「ああ……伊吹兄さんも知つてるだろ? 三司さんの本性……」

昼間のことを思い出しているのか、暁の口元が引き攣つっていた。よほど酷い目にあつてきた模様。まあ暁のことだし、変なこと言つたん

だらなあ。

暁の言う、三司さんの本性——あの晩、あの場所でのこと。彼女の“秘密”が俺たちの眼前に露呈してしまった時、現れた素のことを言つてゐるのだろう。

彼女に関しては、この学院に来るまでに見ていた資料、都市や学院を紹介している映像でしか知らなかつた。

そのせいか、あの変貌ぶりはとても衝撃的だつたけれど……。

「ああ、あれだろ？ いきなり『ぶつ殺してやるー』とか叫んでたやつ。お前のミスで三司さんの服が破けて、その隙間から布生地のパツ——」

そこまで、そこまでだつた。伊吹は不意に言葉を切つていた。背後に、とても、とつても、危険な気配を感じ取つていたから。

培つてきた危機察知能力が、ビンビンに反応している。危険が危ないと。背筋に滲み出た汗が一滴、零となつてゆつくりと伝う感覚が鮮明になる。

俺の後ろに広がる光景が既に見えている暁なんて、露骨に目線逸らしているし……。

凄く、もの凄く気が進まないけれども、このままでいることも出来ないので、恐る恐るゆつくりと振り返つてみると。大体の予想は出来てるけどね。

「や、やあ……三司……さん？」

案の定か、予想通り。

ニコツと優等生キャラを演じる為、笑顔を貼り付けた三司さんが立つていた。あはは、その笑顔がとつても怖いですよ？

「……お二人は一体、何のお話をしていたんですか？ ふふふ」

「い、いや、別に変な話はしてないよ？ 昼休みにうちの弟と三司さんがいちやついていたみたいだから、その時の話を聞いてた……だけだよ？」

「いちやついてなんていませんよ／いないから」

とか言いつつも息の合うお二人。お似合いだね。うん、お似合いだよ。若者なんだから青春しなさいね。親父もそう言つてたからね、潜

入前には。

まあ、七海に彼氏できたら泣くけどね？ 二重の意味で。

「んで、本当は何があつたんよ？」

「特別何かあつた訳ではないですよ。 “あの件” のことで、今後のこととを少しお話したくらいですね。いきなり『君を護る』とか言われても疑問しかありませんから」

暁がついた咄嗟の嘘。あの場をやり過ごす為に零した嘘とはいえ、結局は流れで本当の指令に変わってしまうことになるとはね。

「暁はどこまで話したんだ？」

「何も教えて貰つていませんよ。何を質問しても、権限がないから教えられないの一点張りでしたから。随分と秘匿事項が多いみたいですね？」

「まあ、暁には権限が殆どないからなあ……。次は俺も参加するよ。それなりに権限は持つてるから、ある程度は教えるさ。……個人的に三司さんから聞きたいこともあるし」

「それは…… “変なこと” では、ないですよね？」

「それは、ないです」

微笑んでいた表情が一瞬だけ素に戻つていた。周囲から見えない絶妙な角度で。

変なことって、一体何のことを聞くと思われたのだろうかな？  
まあ、胸だろうなあ。とりあえず、その能面みたいな顔やめてくれませんかね？ それはそれで、めちゃ怖いんです。

「でもさ、話をしただけという割には、ボロボロの弟が帰つて来たんだが……」

「ああ、そのことですか。護衛をするにあたつて、私のアストラル能力を把握しておきたいと提案されたので、数秒間だけ地上の人ではなくつてもらつたからですね」

何をされたのだろう……。気にはなるが、俺も彼女の能力を把握している訳ではない。入江さんに教えてもらつたニュースを確認しておけば違つたか。

この都市に到着した夜には、既に任務で暇なんてなかつたしなあ。

「都合のいい仕返しだろ？あの時、俺らに見られたさ」

「やだー、そんなことする訳ないじゃないですかー。うふふ」

完全な棒読み台詞。もうそれ、隠す気ないだろと言わんばかりの。にしても、油断していたとはいえ、暁が簡単に倒されるとは……。後で鍛え直してあげないといけないな。潜入前の任務でも苦戦してたみたいだし、いい機会だね、うん。

「あー、それで思い出したわ。あのさ、三司さんが前に言つてた、なんだっけ……乳房・タイラー？あれって何のことだつたんだ？少し調べてみたんだけど、検索に引っかからなかつたんだよね」

「えー、ワタシ、そんなこと言つたことないですよー、あはは。伊吹君の聞き間違いだつたのでは、ありませんか？」

またもや棒読み……。だが、今度は声に怒氣を滲ませて。気のせいだろうか？彼女の後ろにもう一人の三司さんが見えるような……。そしてもの凄い剣幕で睨まれているような……。

氣のせいだ、氣のせいだな。氣のせいですね？

「（おい。こんな所で“それ”を口にすんじゃねえよ、ぶつ殺すぞっ！）

「（こ、こいつ、脳内に直接つ……！？）

傍からすれば、笑顔の三司さんが編入生に話しかけている絵でしかないだろう。それに対して、伊吹も普通に返している。まあ、知らない方が幸せという言葉もあるし……。

「話の途中ですまないが、少し時間を頂けないだろうか？」

その二人の空気を破るように、一人の少女が声を掛けてきた。恐ろしいやり取りが密かに行われているとはつゆ知らず。

さらりと流れる黒髪、凜とした声。このクラスで最初に話した女生徒、二条院さん。全然大丈夫ですよ。寧ろ助かりました。

「どうかしましたか、二条院さん？」

二条院さんの声に応え、振り返った三司さん。その顔には既に笑顔が貼り付けてあつた。彼女の切り替えの速さは最早熟練の技。目を見張るものがある。

「ああ。用事があるのは三司さんではなくて、伊吹君の方なんだ」

「俺に？」

二条院さんの視線が、三司さんから伊吹の方に移る。

コツコツと足音を鳴らしながら、伊吹の前まで近づくと、折畳まれた小さなメモ紙に電子カードのような物を挟んだ状態で手渡してきました。

伊吹はそれを受け取つて、カードを抜き取り、メモ紙の方を開いて見る。そこには数字が丁寧な字で書き並べられていた。

「これって……」

「ああ。先生から頼まれていたのだが、渡すのが遅れてしまつてしまい。そこには、君がこれから生活する寮の場所と、部屋の番号が書いてある。大きな荷物も含めて部屋の中へ既に入れてあるそうだ」「へえ、てつきり寮の入り口にでも置いてあるもんだと思つてたよ」「流石にそれはないさ。それと、そのカードキーは部屋の鍵となつている。オートロックだから部屋の中に置き忘れると、閉め出されてしまうから気をつけてくれ」

「あいよ、分かつた。あんがとね、二条院さん」

一通り説明を受けた後、ブレザーに仕舞う。用事を済ませた二条院さんは、手をこちらに振りながら教室を出て行つた。

さてと、二条院さんが間に入つてくれたことで、さらりと話題を変える。自分で振つておいてなんだが、他のクラスメイトの前なら三司さんが素を出せないことを利用して。

「なあ暁、これから時間空いてるか？」

「いや、悪い。柿本先生に呼ばれてるんだ」

「そつか、じあまた後で連絡するわ。お前にも聞きたいことあるし」「わかつた」

そこまで話すと、暁の席から離れて自席に戻ることに。グサグサと突き刺さる三司さんの鋭い視線を背中に感じながら。後は任せたぞ、暁。

距離を取つて、張り詰めた空気が途切れた瞬間、一度大きめな息を吐く。机の上に置いていた鞄を掴むと、丁度良く携帯が数度震えた。タイミング的に七海からだろうと確認すると、新着メッセージが一

件。昇降口の前で待つってくれること。「分かった」と短文で返信し、教室を後にしていった。

†

廊下は走らない——というのは、学校として当たり前のこと。怒られない程度の急ぎ足で昇降口へと向かって行き、到着するや否や靴を履き替えて外に出る。

学年問わず、生徒たちで賑わう昇降口前の広場。七海がその喧騒を避けるかのように、きよろきよろと視線を動かしながら、端の方で、ベンチに座っている姿が目に入った。

愛しの妹を先に見つけた伊吹が駆け寄つて行く。その途中、七海も兄に気が付いたようで、立ち上がりトコトコと小走りで近寄つて来た。

相変わらずの小動物感。とても愛らしい。

「悪い悪い、待たせたか？」

「ううん、大丈夫。ワタシもさつき来たところだつたから。えへへ」「そうかい。んじや、行くか、時間もあんまりないしな」

七海と並んで学生寮へ歩く。敷地の見取り図は記憶しているので、寮までの案内は特に必要ない。……数年ぶりかな、こうして七海と一緒に下校するのは。

「久しぶりだよなー、こうして一緒に帰るのも」

「うん、そうだね。中学校以来……じゃないかな？ 伊吹兄さん、別の高校に行つちやつたし、一人暮らしも始めたから会う時間、大分減つちゃつたし……」

「そうだつたなあ……久しぶりに手でも繋ぐか？」

「久しぶりについて、そんなこと小さい頃しかしてないでしょ？」

「ちえー、バレたかー」

隣から、ジト目で見上げてくる七海。それにクスッと笑い返すと、七海は表情を緩めていた。こうした二人の時間が懐かしくて、心地よくて。少し、切なく感じて——。

任務とはいって、編入して良かったなと思える瞬間なのは確かだ。まあ、そもそもの話、同じ家で今までと変わらずに暮らしていればよかつたんだがな。

…。

……。

暫くして、学生寮が見えてきた。

4つの建物が等間隔で並び建ち、それぞれの間に広がる中庭には、芽の整えられた芝生が敷かれている。流石、この学院の生徒が全員生活している寮なだけはあり、建物としては、かなりの大きさがあった。「夜中しか見てなかつたけど、立派なところだな」

「新しい建物だからね。それで？ お兄ちゃんの部屋はどこなの？」七海に聞かれ、ブレザーのポケットから折畳んだ紙を取り出す。挟まれたカードキーを避けると、数字を改めて確認する。

「えーっと、第三寮だつてさ」

「ホントに!? ジやあ、ワタシや暁君と同じだよ」

「お、マジか。それは助かるな、色々と」

生徒としても、特班としても。最悪、通信が使えない状況になつたとしても、同じ寮という距離であれば、直接会うことができる。それに、妹と一緒に……うへへ。

「それなら寮の中の案内とか寮生活のルールとか、後で教えてあげるね」

「ああ、あんがと。やっぱ七海がいてくれるのは心強いなー」

「ふえあ!? な、何言つてるの！」

「別にホントのこと言つてるだけさ。ほら、行こうぜ」

早速と第三寮の中へ入り、階段を上がつていく。メモとドアに書かれた数字を見比べながら部屋を探す。215……、216……、217……。そして218号室、ここだ。

「……の部屋か」

「えつ、ここなの？ 伊吹兄さんの部屋……」

「ん？ ああ、そうだけど、どうかしたか？」

「う、ううん。な、なんでもないよ！ 気にしないで、えへへ」  
焦りと、何かを誤魔化すように、両手を振つて見せる。でも、心な  
しか、どこか嬉しそうにしているのが不思議などころだつたけど。  
「まあいいや。じゃあ先にある程度は進めておくから、七海も準備し  
ておいで」

「うん。じゃあ着替えてくるからね」

そう言うと、鼻歌交じりの上機嫌で階段を上がつて行く七海。聞い  
た話では、4階からが女子のフロアになつていてのことだ。  
結局、理由は分からずじまいだつたが、その背中を見届けた後、渡  
されていたカードキーで部屋の鍵を開け、中に入った。

†

「お、お兄ちゃん……ワタシ、もう我慢できないよお……」

七海の頬を汗がゆつたりと流れしていく。吐息も段々と荒くなつて  
いる。自分の名前を呼ぶ妹の甘い声に少しどキッとしてしまうが、こ  
こで腕の力を抜く訳にはいかない。

「あと少しだ、我慢してくれ……ほら、俺も一緒にいくから」

「も、もう……限界っ、だよつ……うう……」

七海の足が小刻みに震え始めていた。上手く力が入らなくなつて  
きた証拠だ。それに気が付いた伊吹は自分の足を近くに寄せて、七海  
の体勢を支えるようにして形を保つ。

「もう少しだ、もう少し……頑張れ、七海」

「ううう……」

ギシツツと小さく床が軋む音を鳴らし、二人だけの空間、俺の部屋  
に声が広がる。あと少し、あと少しと声を掛けながら、ゆっくりと体  
を動かしていく二人。そして――。

「よし、いくぞっ！ セーの、よいしょー！」

七海と息を合わせ、ドンッと胸ほどの高さがある棚を床に下ろし  
た。

「大丈夫か、七海」

「ホントに疲れたよお……」

これで大きな荷物の移動は完了。ベッド等の重い家具の類いは引っ越し屋が入れてくれていたが、自分の好んだ位置に移動させるという作業は必要だった。

昼休みに七海へ頼んでいたことは、編入に伴つた引っ越しの荷物整理のこと。この分なら残りは段ボールを開封して、中身を整理すれば、引っ越しの大部分は終わりかな。

本来なら棚みたいな重たい家具は、晩に手伝つてもらいたかつたんだが……。こういう時にもあいつの能力はとても役に立つし。

先生に呼ばれているなら仕方ないけどさ。

七海には小さい荷物。それこそ段ボールとかの荷物整理をと思っていたのだが、これくらいの重きなら私でも運べると言い出したので、一緒に運んでみることに。

まあ、案の定目の前でへたり込んでいる訳なんだけども……。

「お疲れさま、ホント助かつたよ」

薄手のTシャツにショートパンツ。軽装に着替えて来た七海は、太ももがえちえち……暑そうに胸元をパタパタさせている。

まだ夏も半ば、この程度の作業でもそれなりに汗はかくもの。微妙に湿つたシャツのせいで、七海の下着の色が微妙に透けてしまつて、いる気もするが、兄といえども直視はいけない。勿体ないけど。非常に。とても。黒か……。

「さて、休憩するか。飲み物なら学院の自販機で買つてあるから」  
邪魔にならないように隅へ置いておいたペットボトルを取り、七海に手渡す。喉が渴いていたのか、一度に半分まで飲み込んだ。

「ふはあ～、生き返ったよ～」

「無理しなくてもよかつたんだぞ？ 晩だつて先生に呼ばれただけみたいだし、そんなに帰りが遅くなる訳でもないんだから……」

「別に無理はしないよ。これくらいならワタシでも大丈夫なんだから」

「そつか、少し見ない間に立派になつて……お兄ちゃんは嬉しいぞ

ら」

全然大丈夫には見えないけど、可愛らしく口元を緩める妹の笑顔が愛らしく、自然と頭に手を伸ばしていた自分がいる。

またお昼みたいに拒まれると思ったが、意外にも今回はずんなりと受け入れられていた。

「嫌がらないんだな？ 学院じや拒否られたのに」

「べつ、別に嫌じやないからいいのっ！ ……今は一人だけだから……」

「そんなもんのか」

「そんなもんなの、いいでしょ。全く、ワタシが普段どれだけ我慢しているかなんてお兄ちゃんには分からんんだから……」

「ん？ なんか言つた？」

「……なんでもないもん」

七海のそういういた基準がよく分からんなど思いつつ苦笑を見せ、その間も撫で続けること数分。汗も程々に引いたので、作業を再会することに。

「さてつと、そろそろ続きを始めるか」

「う、うん、そうだね」

……。

……。

……。

……。

「よし。これで最後つと……。あんまり遅くならなくて良かつたな」

「まあ、お兄ちゃん一人だと今日中に終わりそうにないもんね、こういうのつて」

「そう言わると痛いな、あはは……。後でお礼するから、何が良いか考えておいて」

「お礼……お兄ちゃんからのお礼かあ……」

何を思ついたのかは知らないが、僅かに頬を染めたかと思つきや、顔を隠すように俯ける七海。何か言い出しちゃうことでもあるのだろうか？

「ね、ねえ、お、お兄ちゃん。そのお礼つてさ、今でもいいかな？」

「ああ、いいけど？」

七海はもじもじと、胸元で両手の指を合わせていた。この仕草には覚えがある。七海が見せる珍しい仕草。兄に甘えたい時に見せるものだ。

「ぎゅーって、してほしいって言つたらダメ……かな？」

「いや、全然いいけど……その程度でいいのか？」

「う、うん……」

恥ずかしそうに、耳まで赤くした七海。可愛いな、可愛いな、もう可愛いなあー。というかそれって俺へのご褒美じゃないですかね、我が妹よ。

「それこそ小さい頃以来じゃないか？『雷が怖い』って泣いてた時とか――」

「そういうことは思い出さなくていいからっ！」

「俺はてつきりご飯奢つたり、買い物の荷物持ちとかかなつて思つていたんだけど……まあいいや。ほら、おいで。七海？」

両腕を広げ、妹の名前を呼ぶ。

「…………う、うん、お兄ちゃん……」

躊躇するように、戸惑うように。だが、確実にゆっくりと手を伸ばして、足を進めて。距離が近づくにつれ、七海の鼓動が聞こえてくるような気がした。

七海の体があと数センチで、数歩で、伊吹の胸板に届く。広げている両腕の中に妹の体が収まるまであと少し。こつちも何だか緊張してきただ。

七海の伸ばした手が、指が先に伊吹の体に触れた。伊吹がそれに応じるように、自分の腕で華奢な体を包もうとした瞬間———ドアがノックされた。

「おーい、伊吹兄さん。先生の用足し終わつたから來たぞ」

ドアの鍵は掛けておらず、暁は普通に入つて來た。他人の部屋ならば、そんなことはしない。家族、兄弟だからこそか。

「…………ッ！　じゃ、じゃあワタシは自分の部屋に戻るからッ！」

顔から湯気でも出そうな程赤くしたまま、逃げるようになに七海は自分の部屋に走つて帰つて行つた。帰つていっちゃつた……。惜しかつ

た、惜しかった。

「七海のやつ、どうしたんだ？ あんなに慌てて……」

「暁。本気のグーで殴つていいか？」

「何で！？」

「ああ、もう。暁君のせいで飛び出して来ちゃつたよ……」

階段を駆け上がり、女子のフロアまで全力で逃げてきた七海。壁に手をつきながら息を整えると、長く大きな溜め息をついていた。

「（もう少しだつたのに……。タイミング悪すぎだよ、暁君。ホントつ、昔からそういう所あるんだから……まったく、もう……）」

あと数秒……いや、一分だけでも待てなかつたのかなあ。

そんなことを考えて、落ち込んだまま廊下を歩いていると、いつの間にか自分の部屋に着いていた。もう一度息をついた後、鍵を開けて中に入つていく。

壁にあるスイッチを押し、部屋の明かりをつける。まずはタンスに向かい、着替えを取り出すと、伊吹兄さんの手伝いで汗をかいた服を脱いだ。

これはお風呂に行く時に洗濯してこようと、洗濯物カゴに入れていく。そして、部屋着に着替えてベッドに腰をおろした。

「……でも、伊吹兄さんの部屋が丁度この下になるなんて……」

窓の方に視線を向けて、そんなことを呟く。

部屋の隅にはこつそりとロープが隠してある。これを使って、窓から一つ下の階にある暁君の部屋に行つたことがあった。大変な目にあつたりもしたけど……。

この寮ではルールとして、男子は女子フロアに入れる時間が制限されている。女子には時間の制限はないけど、あまり遅い時間に男子フロアへ出入りしているのは、良く思われないらしい。

それならばと、廊下を通らず、誰にも見られず、向かえれば大丈夫だろうと準備した物がこのロープ。部屋割りが決まってから、使えそうだったので、こつそり購入しておいた。

特班としての打ち合わせもあるし、新規任務や経過報告で、夜中にしか集まれないこともある。編入する前は家で簡単に行えていたけど、ここでは気を使わなければならない。

ホントは同時通話でもいいんだけど、折角同じ寮で生活してるんだもん、直接会つて、打ち合わせしたいよね。

暁君の部屋の高さに合わせていたロープの結び目を少しだけ変えて、長さを調節すれば、伊吹兄さんの部屋まで届くはず。これで、打ち合わせの時じゃなくても――。

「また後で行こつかな。今度は邪魔されない時間に……えへへつ」自覚できるくらい、顔のにやけが隠せていないのが分かる。今日はもう伊吹兄さんの顔を見れないかも知れない……そう思えてしました。

そんな時、コンコンッと部屋のドアが叩かれる。誰だろう……。ベッドから立ち上がり、ドアを開けてみると、廊下に立っていたのは千咲ちやんだった。

「……あ、部屋に戻つてたんだね、七海ちゃん」

「ど、どうかしたの？ 千咲ちやん？」

「うん。暇ができたから、ワタシも引っ越しの手伝いしようかなって。でも、この時間に部屋にいるつてことはもう終わつちやつた？」

「うん、ついさつき終わつたから……」

「そつか。だから七海ちやんにやにやしてんんだね！」

「ふえつ!? そ、そんなことないよ？」

指摘され、否定しながらも、口元を手で覆い隠す七海。そんな姿を見て、指摘した本人は違う意味でにやにやしていた。

「伊吹お兄さんのことになると、七海ちやんすぐ顔に出るから分かりやすいんだよね。これは何があつたか、後でじつくりと聞かせてもらおうかな？」

「ホントに何もないからっ！ ただ一緒に荷物の整理してきただけだから！」

ぱたぱたと手を振り、精一杯に誤魔化そうとするが、かえつて逆効果。何かがあつたと確信したようで、千咲ちやんの笑みが一段と増したような気がした。

「ふくん。じゃあ、この話は一旦置いといて……汗もかいたと思うし、夕飯の時間まだまだ余裕あるから、先にお風呂行つちやおうか？ ま

だ七海ちゃんと入ったことなかつたし。それに……へ、変な噂もあるから……」

「違うからつ！ あ、あれは勘違いだから！」

「なら、尚更一緒に入ろうね。それじゃ、洗面道具と着替え持つて来るから待つててね？」

断る間も無く、そう言い残して、千咲ちゃんは自室に戻つていった。何か凄く疲れた気がする。それに、お風呂に行く前にやけ顔をどうにかしないと……。部屋の鏡でチエックしてこよう……。

†

七海が帰つてしまつた後の伊吹の部屋。その中では、未だに状況が理解できないまま、『若干』不機嫌になつてゐる伊吹と、それを見て小首を傾げる暁が残されていた。

「……い、伊吹兄さん？」

「はあ、惜しかつたなあ……。暁がせめてあと数分来るのが遅ければなあ……。ほんと暁つて昔つからこういうところあるんだよなあ、まったく」

「なんか、悪かつたな？」

「……いや、いいさ。鍵を掛けてなかつた俺が甘かつただけだから。  
……うん」

「そ、そうか……」

半ば、放心している様子だつたが、解体した段ボールを集め始めた伊吹。暁もつられるように、近くにある段ボールを手に取つていく。「結局のところ、放課後に時間あるかつて何のことだつたんだ？ それを聞きたくて二条院さんに部屋の番号聞いて来たんだけど……」

「ああ、お前に頼みかつたことは七海と終わらせたから大丈夫だ。意外と力が必要なことだつたんだが、七海が頑張つてくれたからな」集め終わつた段ボールを重ね、紙紐で縛りながら伊吹が言う。頑張つてる七海の姿、可愛かつたなあ。七海の顔を見たら、思い出してにやけそうだ……。

「暁の方こそ先生からの呼び出しなんて、編入早々もう問題起こしたのか？」

「違う。柿本先生に体育の授業で水着が必要になるから、用意して置いてくれって話をされただけだ。特に指定はないから私物でもいいらしいぞ」

「水着かあ……。暫く海とか行つてないから、昔のしかないなあ」

最後に海へ遊びに行つたのはいつのことだつたか。仕事の休みが続いた時に、家族で行つたのが最後か……それでさえ、中学の頃か。「学院に頼めば用意してくれるって話だけど、伊吹兄さんは頼むか?」「指定がないってことは、周りは殆ど自前の水着を着てるってことだろ? 僕らだけピチピチモツコリのスク水なのは勘弁だな。女子にしか需要はないだろ、ああいうつてさ」

そもそも昔の水着は持つて来ていない。必要ないだと思つて置いてきた。

学院にプールがあることを知つたのは、移動の最中だつたし。プールがあつても水泳の授業がない学校だつてあるからな。

「暁はこつちの水着売つてる店とか知らないのか?」

「分からんな、俺もこつちの街についてはまだ詳しくないから……」

この場にいる俺たちでは、お手上げ状態だつた。学院の見取り図は覚えているが、街の方はまだ知らない。後々必要になることだ、良い機会だし調べておこう。

「明日、誰かに聞いてみるか。二条院さんとか詳しそうだし」

「そうだな、少なくとも俺らよりは知つてるだろ」

「七海には俺から言つておくよ。あいつも持つてきてないだらうからな」

「ああ、分かつた」

暁の話もまとまり、廃棄する物も片付いた。残りは特段に手伝つてもらうこともない。暁は自室に戻る為、伊吹の部屋を後にしようと部屋のドアに手をかけた。

「……」

「ん? どうかしたか?」

そのまま出て行くものだと思っていた暁がその足を止め、携帯に目を向けていた。視線を外していた伊吹も気になり、声を掛ける。

「……。なあ、伊吹兄さん」

「何かあつたのか？」

「親父から連絡が来た。この前送ったAEMSの情報も含め、大体の犯人が割り出せたらしい。今夜にもこちらと連絡が取りたいってさ」「お、仕事が早いな。まあ、でも能力も珍しい類いだつたし、事件が起きた箇所もほぼ絞れてたし、そんなもんか」

この都市で起きた事件。この都市に暮らしているアストラル使いが全て登録されているAEMSの情報。そこに事前調査の報告も合わされば、ほぼ条件は揃う。特班にかかれ、後は時間の問題。その時間も大して掛からないだろう。

「というか、伊吹兄さんじやないんだな。連絡いくのつて」

「そりやあそうだろ。この任務のメインはお前と七海で、俺はあくまでサポートだし」

「そういうもんなの？」

「そういうもんなの？」

伊吹の返答に微妙に納得していないような顔をしながらも、今夜の集合時刻を決めた後、暁は今度こそ自分の部屋に帰つて行つた。

†

日も傾き、夕日が窓から差し込む。十九時から寮の決まりとして、夕食の時間となっていたな。七海からそう教わっていた。その時点で、点呼も行われるらしい。

寮生活、生徒同士の集団生活なのだ。規則がいくつか存在しているもの。外出する際に届け出を出さなければならぬし、門限だつて存在する。

点呼に遅れれば、反省文とかの罰則があることだろう。朝食の時間も決まつているから、家でのように自由な時間で食べるなどは出来ない。

まあ、数日もあれば慣れるものだ。一人暮らしですっかり身についてしまつた不規則な生活習慣を見直すいい機会でもあると思えばいいか。

「（食堂にはまだ行つたことないし、早めに行こうかな……）」

そう思い、部屋を出ようとした時、タイミングよくドアがノックされた。こんな時間に誰だろう。返事をすると、暁の声がする。まだ何か話でもあつたのだろうか？

ドアを開けると部屋の前には勿論のこと暁の姿が。それと、暁の隣にもう一人。中性的な顔立ちをした子が立っていた。

「どうした暁……と、確か、同じクラスの……」

童顔というか、女顔寄りというか……着ている男子生徒の制服からしても、男だってことは分かるけども。いや、俺が見破れないだけで、実は……ということもあるのか？

「やあ、初めまして。同じクラスだけど、まだ話したことはなかつたよね。僕は周防恭平。暁のお兄さん……なんだよね？ これから宜しく」

「ああ、こつちこそ宜しく頼むよ。まだまだ分からぬことだらけだからな」

「暁のことも名前で呼んでるし、伊吹って呼んでもいいよね？ 僕のことも恭平でいいからさ。伊吹だけ在原で呼ぶのもなんか変な感じだし」

「わかつた、じゃあ恭平つて呼ばせてもらうな」

伊吹は手を伸ばして握手を求めるが、恭平もそれに合わせて握手を交わしていた。握ったその手に伊吹が少しの違和感を覚えながらも。

「……」

「ん？ どうかしたの、伊吹？」

「……いや、別に何でもない。んで、何の用事だ？ ただ挨拶に来たつて訳じやないだろ？」

「ああ、夕飯に行くから伊吹兄さんを誘いに来たんだ」

「そつか、なら俺も丁度行こうとしていた所だつたし、一緒に行くか」部屋に鍵を掛けて二人と食堂に向かうことに。食堂の位置は一階

となつてゐる。階段を下りて廊下を進んで行くと、一際と広い場所に出た。

「ここが食堂か。随分と広いんだな」

長机に椅子が多く設置され、外側の一面だけ中庭が見えるガラス張りになつてゐる。かなりの人数で利用することが出来そうだった。全寮制で暮らしている生徒も多いから、これくらいは必要なんだろうな。

「前の学校には食堂なかつたの？」

「ないな。購買はあつたから、行列によく並んでた」

まだ時間があるからか、生徒の姿は少なく席は選び放題だつた。窓側に席を取り、夕食の時刻まで待つことに。恭平から学院のことや街のことを色々聞いておいた。

「そういえば、今度水着を買うことにしたんだけど、どこで買えるか知つてるか？」

「ああ、その話は暁からも聞かれたよ。特にこだわりとかがないなら、スポーツ用品店にいけばあると思うけど……」

「なら、手軽に買えそうだな」

スポーツ用品店か……まあ、妥当なところか。別にこだわりもないし、シンプルに黒いやつで問題ないからな。店の場所は後で調べておくか。

……。

……。

夕食の時間が近づくにつれ、段々と生徒たちの姿が食堂に増えてきた。その人の流れの中に七海の姿を見つける。どうやら壬生さんと來ているみたいだ。

だが、きょろきょろとして誰かを探してゐる模様。すぐに席には座らない。俺たちを探してゐるのかと思い、声を掛けようとした時、視線が重なつた。

手を挙げてこちらに呼ぼうとするが、こちらに気が付いた七海は、そそくさと離れた席に壬生さんを連れて座つてしまふ。

「ありや、嫌われたか……」

「どうかしたのか？」

「いや、七海がいたから誘おうとしたんだが、他の席に座つちまつただけだ」

少し残念だったが、あの人見知り達人の七海にできた学院での友達だし、ここは女の子同士にしておこうと諦める。久々に一緒に食べたかつたけどね……。

その数分後、時間となつた。点呼が行われて夕食。食堂の料理はとても美味しかつた。まあ、七海の手料理ほどではないけどね。

恭平の話だと、それぞれの寮で昼食が食べられるとのこと。そして、それぞれの寮の出しているメニューには特色があるそうだ。明日から利用してみよう。

今日の分は、来る途中にコンビニに寄つて済ませたからな……。道理で昼休みに教室があんなにも静かだつたのか。

食べ終えた食器を回収棚に返して、周りの生徒たちが自室に戻つていく。それと同じく暁たちと食器を返した後、食堂を出た。

「僕はお風呂に行くけど、一人はどうするの？」

食堂を出てすぐの場所。階段に差し掛かる前、恭平がこちらに振り返る。暁は一度部屋に戻つたら、入りに行くと答えていた。

うーんと、悩んだが、七海がまだ食堂から出てきていないことを思い出す。なら、少し待つてあの話を今のうちにしておこうかな……。「悪い、俺は七海に話があるからここでもう少し待つてるわ」

「そう？　じゃあ、僕たちは先に行つてるからね」

二人とは別れ、暁たちは階段を上つて行く。食堂から七海たちが出てくるまで、暫くの間ロビーの長椅子に座つて待つことにした。

†

「七海、ちょっとといいか？」

「い、伊吹兄さんっ!?　ど、どうしたの？」

壬生さんと部屋に戻る途中だつた可愛い妹を呼び止めた。何故か

焦った様子を見せる七海を不思議に思いながらも、用件を手短に話すことには。

「暁から聞いたんだけど、こここの体育の授業は水着が必要になるんだってさ。七海は持つて来てるか？ 確か、持つてはいたよな？ 黒いやつ」

「持つてきてないよ、水着なんて……。そもそも、わたしが持つてる水着はだいぶ前のだからもうサイズが合わないと思うし……。色々と……ね」

七海が言いはずらそうに呟くと、『何か』を察した壬生さんが悪戯っぽい笑みを浮かべて、コソコソと傍に寄つて来た。そして耳元に顔を近づけてくる。

「お兄さんお兄さん。知つてます？」

「ん？ 何を？」

「ご飯の前にワタシと七海ちゃん、先にお風呂入つてきたんですよ。そしたらなんとつ、七海ちゃんの胸が……湯船に浮いていたんですよ！」

「ふえあ！？ ちょっと、な、ななな、なに言つちやつてるの千咲ちゃんつ！？」

慌てて壬生さんの口を押さえて、伊吹から引き離す七海。沸騰したかのように耳まで真っ赤に染めた七海を見て、壬生さんは楽しそうにもごもごしながら笑つていた。

「い、伊吹兄さん？ 千咲ちゃんの冗談だからね？ ヘ、変な想像なんてしないでよね？」

「いや、想像も何も……浮くのは元々知つてるけど？」

「……へつ！」

「……え。ほ、ほんと……ですか？」

「嘘じやないけど？ 中学の頃から浮いてたし……」

沈黙が訪れていた。壬生さんの顔が驚愕したまま硬直している。そんなにも変なこと言つたのかな？ いやだつて家族だもん。知つても可笑しくないよね。ね？

「ね、ねえ七海ちゃん……。七海ちゃんのお兄さんつて、もしかして

「……危ない人?」

「そんなことない……と、思うけど……」

七海の手をそつと口元から外し、心配そうな様子で問い合わせている壬生さん。それに対して、はつきりと否定ができない七海。

何の話かまでは聞き取れていらない伊吹は、首を傾げて七海に視線を送るが、目を逸られ、壬生さんと共に少し距離をとられた。

「……?」

二人で何やら相談した後、こちらに可愛らしく一礼して、壬生さんは階段を上つていった。そして、七海だけが頬を染めたまま戻つくる。

「何の話してたんだ?」

「伊吹兄さんには関係のない話。それで? 水着がどうかしたの? まさか千咲ちゃんの前で、妹をからかいに来た訳じやないでしょ?」「ああ、そうそう。話を戻すんだけど、体育の授業で水着が必要になるって言つただろ? それで、暁と今度買いに行くことになつたんだけど、七海もどうかなつて話」

「それなら、私も一緒に行こうかな。家に取りに戻つても意味ないし、ネットで注文してもいいけど、折角だから自分で見て新調したいからね」

「じゃあ決まりだな。今週末になると思うから、予定空けといてね。それと——」

そこまで言うと、伊吹は辺りを見渡す。もう残っている生徒も疎ら。それを確認すると、七海に顔を近づけ、小声で話す。

「今晚に親父と同時通話で連絡をとるから。遅い時間になると思うけど、待機しておいてな」

「う、うん、わかつた」

「それじゃ、また後で」

消灯時間もどうに過ぎた夜中。七海と話した後、入浴を済ませて現在。照明を消した部屋の中には、窓から月明かりが僅かに入り込んでくるだけ。

青白い光はベッドに座る伊吹の体を仄かに照らす。ただ静かに伊吹は、特班製の特注タブレットに連絡が来るのを待っていた。

「（こんな夜には色々なことを思い出すなあ……）」

ふと。窓越しに夜空を見上げながらそんなことを想う。過去、俺がまだ特班に所属する前の思い出。楽しかつたこと。辛かつたこと。今の親父に出会ったあの日までのことを。

「……『あの日』もこんな風に綺麗な夜だつたよな、兄さん……」

一人、静かにそう呟く。他に誰もいないはずの部屋で、まるで誰かがいるように。問い合わせるように。語りかけるように。

「あれから俺も少しくらいは、兄さんみたいに強くなれたのかなあ……。自分じゃよく分からんんだよ。アイツらのことも結局最後は守れなくてさ……」

こうして一人だけ新しい家族と暮らしている。自分が、幸せに暮らしている。きっと兄さんはそれでいいんだと笑つてくれるだろうけど、俺は――。

視線を落とした顔に影が差す。タブレットの黒い画面に自分が映つた。凄く情けない顔。こんなのを見られたら、怒られそうだな。そう苦笑する。

そんな時、画面がついた。着信を知らせるよう画面にコードが表示される。一瞬、目を細めたが、それで我に返つていた。

編入してからの初連絡。全然なかつたせいか、妙な懐かしさを感じていた。表示されているコードは親父……室長のものだ。

画面の通話ボタンに触れると、ほぼ同時に暁と七海にも回線が繋がっていた。今回はビデオ通話。それぞれの顔が小さく画面端に映つている。

「……ちらレヴィ〇」

『こちらレビュー6／レビュー9』

『よし、全員揃つたな。』

室長が確認すると、画面中心に前回の任務で入手したAEMSの情報が現れた。二人の男の顔写真。それと、保有しているアストラル能力についてだ。

『入手してもらつたデータと、現段階までの調査によつて、偽札事件の犯人を二人まで絞ることが出来た。認識阻害、もしくは近しい能力を持つた人物。それがこの二人だ』

「一人は学生……橘花学院の生徒。もう一人は社会人……か」

俺はある時、外で待機していたから直接データを見ていない。実際に行動していた七海と暁は見覚えがあるみたいだつた。

管英人。小野清国。この二人。管英人は、橘花学院の一年C組。小野清国はこの都市で働いている。

『小野清国を調査した所、彼にはアリバイがあつた。事件当日は職場で働いていたと確認が取れている。今回の件に関与している可能性はほぼ無いだろう』

『となると、残るもう1人が……』

『ああ。偽札を持つていた連中にこの顔写真を見せたところ反応があつた。それに管英人の姿が現場付近の防犯カメラ数台に映つているのも確認できている』

反応があつた……と言つても、どこで見たのかまでは覚えておらず、どこかで見たことはあるといつた曖昧なものだつたらしい。

これもアストラル能力の力、認識阻害によるものと判断された。万が一にも偽札がバレた場合、自分と偽札のことが繋がらないようにならんだろう。

「学院の生徒なら明日にでも直接確認してみるさ、どんなやつか見れば大体分かるし」

『同じ一学年だし、わたしが見てこようか？』

「いや、これは俺が行く。念の為、本当にアストラル使いか確認したいし。それにレビュー9だと、もし変に思われた時に誤魔化すの下手だろ？」

『うう、そ、それを言わると……』

『……なら、レビュイで決まりだな』

現場の三人で話がまとまる、室長が口を開く。

『では、明日のこの時間。その情報を踏まえた上で、もう一度連絡をとることとする。以上、通信は終了だ。何か問題が発生したらすぐに連絡するように』

「りょー」

『了解／了解』

†

早朝。日の昇り始め。程よい暑さの時間帯。

朝食前に伊吹はジャージに身を包んで、学院の敷地内の整備された道を走っていた。これは日課の体づくり。体が資本の仕事だから欠かせない大事なこと。

家の周辺で走っていた頃とは違い、学院の敷地内では、同じ道を往復して距離を稼ぐ方法をするしかない。けれど、これはこれで好都合だつたりもする。

編入する前、事前に七海から送られてきた情報で、ある程度の警備システム配置は把握していた。だが、実際に全てを見て確認した訳ではない。

今後の為にも、詳細に調べておきたいところ。でも、歩きながらきよろきよろとしていれば、変に怪しまれる可能性も考えられる……。

そこでだ。ジャージ姿でランニングしながらとなれば、カメラに映らうが怪しまれることはない。まさに一石二鳥というべきか……。

ということを踏まえて、一定のテンポで走りながら記憶しているカメラの位置やセンサーの配置を順々に確認していく。

あからさまに設置された監視カメラもあれば、巧妙に隠された暗視カメラや赤外線センサーもあつた。改めて見ると中々に考えられた警備システムだと感心する。

途中、茂みの向こうに広がる芝生のスペースから、聞き覚えのある少女の声が聞こえた気がしたが、今はこちらに集中したいので聞き流しておいた。

……。

……。

そんなこんなで、敷地内をほぼ一周した後、寮の前まで戻つて来る。重点的に調べたかった部分の確認は出来たし、残りは建物内か。その辺りは休み時間にでも調査をしようかな……。

携帯で時間をチェックすると、朝の点呼まで一時間を切つていた。汗を流して、学院に行く支度もしなければ。入念に調べすぎたか……。意外と時間が掛かつてしまつたな。

タオルで汗を拭きながら、玄関からロビーへと向かう。自室に戻る為、階段に差し掛かつた曲がり角で、見知った少女とばつたり出会つた。

「あ、ごめんなさ……つて、なんだ、伊吹君か」

「おおつと、三司さんじやん。こんな時間にどうかしたんか？」

人の顔を見て、即効でキャラを切り替える三司さん。まさに早業。けれど、伊吹も負けてはいない。目の前に現れた固い偽乳に衝突するという定番の展開を回避していた。

「少し用事があつてね、もう学院に行かなきやいけないの。朝は弱いんだからほんと勘弁してほしいんだけど……。ああ、マジで最悪……」

「まあ、なんというか……お疲れ様です？」

「チツ、他人事だと思つて……」

機嫌が悪いのか、単に素なのか。軽い舌打ちに加えて睨まれる。本

当に学院や他の皆の前でキャラ作つてる時とは正反対だよなあ……。

伊吹がそんなことを密かに考えていると、よほど時間がないのか三司さんは腕時計に視線を移した後、少し焦つた様子で横を通つて行く。

人気者になると大変だな、とすれ違うときに声を掛けた時、そのま

ま学院に向かうと思われた足を止めていた。そして思い出したかのように三司さんがこちらへ振り返る。

「……ああ、そうだ。教室で言おうと思つてたんだけど、丁度良かつた。今日の放課後に学生会室に来てくれる？ この前の件で話があるから」

「放課後か……分かつた」

「伊吹君の方も私に聞きたいことがあるんでしょ？ ちゃんと来るようにな」

「そん時はお土産でも持つて行くよ。ほら、時間やばいんだろう？ 行つてらっしゃい」

言われなくても、と嫌でも伝わってくるような顔を見せながら、玄関のドアを開けて三司さんは皆よりも先に学院へと登校して行つた。「さてさて、俺も支度しないとな……」

†

午前の授業が終わつた昼休み。昨夜の報告通り、例の生徒を探りに行くか。休み時間の内にやつておきたいこともあるし。放課後に備えてね。

「ねえ伊吹、暁と食堂に行くけど一緒にどうかな？」

授業で使用した教科書を仕舞つていると、恭平がやつてきた。隣には暁の姿が。俺のこれから行動を知つてゐる暁には、こつそりとアイコンタクトする。

「わりいな、今日は用事があるから購買で済ませるよ。本当は食堂に行つてみたかったんだが……ついでになんか買つてこようか？ もちろん代金は貰うけどな」

「そつか、なら仕方ないか。じやあさ、夜食用のパン買うの頼んでもいいかな？」

そう言うと、恭平は財布から五千円札を一枚取り出して渡していく。てつきり小銭だと思つていたが、一体何個買うつもりなのか……。

「それで買えるだけ宜しくね。種類は伊吹のチョイスに任せるよ」「……マジで言つてる？」

「恭平はめちゃくちや食べるんだよ、伊吹兄さん。食堂でも特盛りでとんかつ定食とカツ丼食べてるし……俺の何倍食べてるんだか」「あれが、大食い選手権みたいな？」

「別に成長期の男ならあれくらい食べれて普通でしょ？　暁が小食なだけだよ」

いや、暁とは家族だし、数え切れないほど一緒に飯食べてるが、一般的な量だったと思うぞ？　というか、それだと俺も七海も小食つてことになるんですけど……。

「女の子みたいな華奢な体型しといて……恐るべし」

「伊吹、いま何か言つた？」

「おおつと、もう俺行かない。誘ってくれてありがとなつ！」

問い合わせられる前に、そそくさと退散する伊吹。恭平と暁に軽く手を振りながら、教室を後にしていった。後ろから恭平の声が聞こえた気がしたが、気にしない。気にしてはいけない。

†

一年生の教室が並ぶ廊下。件の人物がいるクラスはC組だったはず……。表札を確認しながら歩いていくと、目的の教室に難なく辿り着いた。

早速と、廊下からなるべく怪しまれないように教室内を覗き込む伊吹。すると、教室の方にA E M Sで確認した顔写真と一致する生徒が見えた。

「（アイツか……）

大人しいというか……物静かという印象を受ける男子生徒だった。昼休みに盛り上がりしている他の生徒とは違い、窓際の席で本を静かに読んでいる。

似たような顔の生徒もいないし、アストラル能力特有の“匂い”も見えていた。あの生徒で間違いないだろう。それにしても……。

見る限りでは、自身の能力を悪用するタイプには見えない。言つちや悪いが、気弱そうだしな。自分から進んで能力を使おうとするタイプでもない。

寧ろ問題を起こしてしまえば、暫く一人で後悔していそうな感じだ。

そうなると、偽札を持っていたあいつらに絡まれて、その場しのぎだけで能力を使用しただけだろうな。そうすれば、何もされることもなく解放されるから。

だけど、今回はそれがいけなかつた。別に能力を使つて、自分の身を守ることを悪いとは言わない。俺だつて昔から散々してきたことだから。

でも、使い方が悪かつた。ただそれだけのこと。相応の対処はさせてもらう。

「……さてと、あとは報告して判断を待つか」

ここに来た目的も終わつたし、上級生が一人で長居していても不自然に思われるだらうから帰るか。そう思つて踵を返したところ、見慣れた少女が目の前にいた。

「こんにちは、お兄さんっ。こんな所で何してるんですか？」

一学年の知り合いは限られていて、これほど気さくな調子に声を掛けてくるのは壬生さんしかいない。背丈の関係上、下から覗かれる形になつてはいるけれど。

「こんにちは、壬生さん。いやあ、ちょっと七海の様子をね。人見知りの七海が上手く馴染めているかなつてさ。兄としては心配なんだよ」「相変わらずの過保護っぷりですねえ。でもでも、七海ちゃんに会いに来たなら教室が違いますよ？ 七海ちゃんの教室はこの隣です。私も同じクラスですから」

「ああ、そだつたのか。七海から教室どこか教えてもらつてなくてさ……」

「私も教室に戻るところでしたし、折角なので一緒に様子を見に行きましようか！」

「ありがと、助かるよ」

笑顔で前を歩き出す壬生さんの後ろをついていく。隣の教室は廊下からでも声が聞こえるくらいで、賑やかそだつた。

まあ、壬生さんのような子がいるクラスだしな、と思いつつ、教室のドアまで来ると、壬生さんと教室を覗き込む。そしてこつそりと七海の様子を見てみることに。

「壬生さんから見て、七海はクラスに馴染めてると思う?」

「そうですねえ……。大丈夫だと思いますよ。七海ちゃん、まだ皆と話す時は緊張しているみたいですが、クラスの皆には人気者ですからね」

「まあ、可愛いしな」

「そうですねえ、特に男子からは人気ですよ? 皆はつきりと口にはしませんけど、行動見てれば分かつちゃいますし……あ、あれとかですね」

見てて下さいと促され、向けた視線の先。授業で先生が使用したホワイトボードの字を消そうとして、手を伸ばしている七海の姿が見えた。

日直が何かだろうか? だが、身長が低くて上の部分に届かない様子。

そんな時、1人の男子生徒が近づいてくる。その男子は七海に声を掛けると、七海から白板消しを受け取っていた。申し訳なさそうにしている七海がとても可愛い。

その後、自分の席に戻った七海を今度は女子の集団が囮む。何の話題で盛り上がってるのかは分からないが、楽しそうだ。

七海はあたふたしてるけども、嫌がってはいないみたい。壬生さんの言う通り、大丈夫そう。そういうえば、七海の学校生活を見るのも久しぶりだなあ。

「あれは?」

「昨日、お兄さんの教室まで行つたじやないですか。あの後、調理実習の授業だつたんですよ。それで七海ちゃんが手慣れた感じでめちゃくちゃ美味しいご飯作るから女子からの人気もでまして……」「ほうほう。なんやかんや、七海も上手くやつてるんだなー」

うんうん、と納得していると、壬生さんが不思議そうな顔をしていた。また何か変なこと言つていたか？ 結局、前の時も何が不味かつたのか分かつてないし……。

「ど、どうかした？」

「いや、お兄さんのことですから、俺の可愛い妹があくとか嫉妬するものかと……」

「妹の成長を邪魔することはしないさ。いずれ七海だつて彼氏とかできて、結婚して、別々に暮らすようになるんだろうし、いつまでも過保護ではいられないよ」

「ほえ？、ちょっと意外でした」

「な、七海に彼氏、彼氏かあ……。そして結婚……うう……泣きそう

……」

「あはは、やつぱりお兄さんはお兄さんですね……」

口元を押さえ、目を俯ける伊吹。感心していたのもあるのか、結局は分かりきつっていた反応が返ってきたせいで、苦笑いを浮かべる壬生さん。

その後、もう少しだけクラスメイトと雑談している七海を見届けていたが、特に問題はないみたい。あんまり長く壬生さんを付き合わせるのも悪いし、頃合いかな。

「……よし、じゃあそろそろ戻ろうかな」

「えっ、七海ちゃんに会つていかないんですか？」

「様子をこつそり見に来ただけだからな。上手く馴染めているならそれでいいさ。色々と教えてくれてありがとね、壬生さん」

「どういたしましてです。また遊びに来て下さいね」

笑顔を向けてくれる壬生さんに微笑み返すと、今度こそ戻ることに。帰り際、携帯で時間を確認すると、昼休みの時間は半分を切つていた。

まだ購買にも寄つてないし、そもそも昼飯を食べてない。恭平に頼まれてたけど、そんなにパン余つてるかなあ。俺の分までなくなりそう。

放課後用のものも残つてると助かるけど、人気高そだからなあ。

そんときはその時で考えるか。とにかく寄つてみよう……。